

放送人の会

No.89

2020.10.30

〒102-0094 千代田区紀尾井町1-1 千代田放送会館 3階 ☎&fax03-3221-0019 Mail info@hosojin.jp

発行 一般社団法人・放送人の会 会長 今野 勉

編集担当 伊藤雅浩 (広報委員長・編集長)、菅野高至 (HP担当)、鈴木典之、

「放送人の証言」公開を目指して

放送人の会 会長 今野 勉

今回の会報の特集は、「放送人の証言」についてである。私たち「放送人の会」は、これまで2000人を越える放送人の証言を収録してきた。

私もそのうちの何十人か分を読ませてもらったが、放送人としてのそれぞれの人生模様が読み取れて面白かった。

もとより「証言」は、思い出話を楽しむために収録してきたわけではない。放送の過去を知ることで放送の未来を考えることが出来るようにするためである。そのためには、証言は正確であることが求められる。

とは言え、私の体験からの話ではあるが、「正しい記憶」というのは、思ったより難しいものようだ。私たち「放送人の会」は、収録した「証言」を公開するための努力をしている。「証言」は不正確なものであってはならない。そのため「自戒」の念をこめて、私の恥ずかしい体験を披露させていただく。

誰にも疑われなかった私の記憶

TBSに入社してまだ6年目の私が、芸術祭ドラマのディレクターを命ぜられたのは1964年、東京オリンピックの年である。私は脚本家の大津皓一さんと相談して、オリンピックの開会式の日にとつぜん、それまで忘却していた沖繩での戦場体験を思い出してしまふ精神分析医を主人公にした「土曜と月曜の間」と題するドラマを作った。

当時、TBSの芸術祭ドラマは、3年連

続で受賞していた。私も自作に多少の自負があった。

しかし、結果は、大賞はおろか5本の奨励賞にも入らなかった。社内の冷たい眼もあつて私はどん底に落ちた気分だった。

ところが、国際部にいたある社員が審査結果に疑問を持ち、「土曜と月曜の間」を、当時最大の国際コンクールとして權威のあつたイタリア賞に出品したところ、世界16ヶ国の出品の中で最優秀の「イタリア賞」を圧倒的支持のもとに授与されたのである。1965年9月のことだった。

こつたことがあつてから、20年とか30年経って私は自分の青春時代を人に聞かれる度にこう話してきた。誰一人として、私の記憶に疑いを持つ人はいなかった。

体験は物語化されて記憶される

1999年から私はTBS刊行の雑誌「調査情報」に、59年入社私たちがテレビ演出部員たちの青春ノンフィクションの連載を始めた。話はどうせん、64年の芸術祭落選、65年のイタリア賞受賞、そして「七刑」担当ディレクターへの件りになる。

社史などの資料で詳しい年月日などを調べようとしているうちに、私は愕然とした、私の記憶の順番がまるで違うのだ。芸術祭担当は64年で正しい。放送は11月29日。そして、翌65年の1月25日に、

なんと、私の七刑デビュー作が放送されているのだ。イタリア賞受賞はその8ヶ月後だ。あわてて関係者に聞いてまわって、次のような事実が判明した。

「土曜と月曜の間」が放送された直後、すなわち、芸術祭の受賞発表もまだされていず、もちろんイタリア賞出品など検討もされていない時期に、「七刑」担当プロデューサーの蟻川茂男さんが私を「七刑」むき、と判断してディレクターに起用し、すぐに制作にかかるように命じたのだ。蟻川さんは、私の芸術祭ドラマが受賞しようとしまいと関係なく、ましてやイタリア賞受賞などまるで関係なく、私を「七刑」のディレクターとして起用してくれたのだ。その英断こそ記憶すべきなのに、何という恥ずべき記憶を私は作り上げてしまったのか。

おそらく私は、自分の人生のある時期を人に語るようになって、無意識のうち「人生の浮き沈み」とか「影があれば光がある」というような「物語」に沿って記憶を組み立て始めたのだろう。それが無意識のうちに行われたため、本人さえその間違いに気づかないのだ。「証言」についての私の自戒である。

「証言」公開のためのこれから

私たち「放送人の会」は、収録した証言を役立てるために、出版という方法で、あるいはデジタル・アーカイブという方法で、世に公開しようと、現在、努力を続けています。自ら掲げた公開目標時期は、放送100年にあたる2025年です。それまで、収録の各証言の正確さを期すために、会員の皆さんのさまざまな協力をお願いする次第です。

特集

「放送人の証言」

はつと

1925年(大正14年)3月22日、日本で初めてラジオ放送が開始されました。アメリカに遅れることわずか5年でした。2025年はそれから100年にあたります。この100年間放送はどう発展してきたのか、放送人はどう奮闘してきたのでしょうか？

放送人の会は、設立当初から「放送人の証言」を20年以上にわたって収録し続けて来ました。そして証言者は今年度ついに200名を超え、さらに新たな予定も入っています。文字起こした証言はA4版で1万ページ近くに及んでいます。

そこで放送人の会はこれを機に「放送100年記念 放送人の証言 出版プロジェクト」として新たな目標を定め、作業に入ることにしました。具体的には2025年3月を目処に「放送人の証言」を全集として出版し、加えてデジタルアーカイブ化しようというものです。これによって放送100年を立体的に検証することが可能になります。映像を伴った本人の証言は類例をみないものであり、放送人の会のみが持つ財産です。放送史の一次資料としてこれが果たす役割は大きなものになるに違いありません。

今回の会報により、皆さんの知識と経験が大いに役にたつプロジェクトが、放送人の会の新たな結束力を生み出すことが出来るよう本企画は立てられました。これまでの成果の一端に触れ、少しでもその全体像をご理解いただける様、資料も添付いたしました。

これまでの作業

私はプロジェクトの前段階の一言の一員として、一昨年の秋から少しずつ資料の整理を始めました。当初は散逸や統一的なファイルの不在などに戸惑いましたが、多くの方々のご協力を得て何とかファイル化することが出来ました。

そしてこれまでの証言の文字起こし文全てに目を通し、全貌を把握することに努めました。その結果、内容の豊かさや多彩さに感動しました。

大本営発表など戦前・戦中の放送現場の様子。GHQの民間情報教育局CIEの指導によるNHK番組制作の激変。民間放送設立への熱い想い。ラジオからテレビに「左遷」された人たちの戸惑い。暗中模索の中からドラマが隆盛を極めるまでの面白可笑しくも懸命な努力。白黒からカラー、衛星放送、そしてハイビジョンという技術の進歩に心血を注いだ人達の心意気。激しく変わりゆく世界の動きを、新聞からの受け売りではなく自分達の言葉と映像で伝えるべく、そのスタイルに磨きをかけてきた放送記者魂。己に誠実に時代を切り取るうとするドキュメンタリストの志の高さ、これら全てが、当事者の生の言葉で語られているのです。

最初の作業は文字データのファイル化です。証言者の略歴、主な業績、証言のメタデータ(収録日、聞き手名)、そして証言内容の目的役割を狙った概要1名分をA4用紙1ページに収まる形に整え、それに従ってデータを入力していきました。イメージが掴みやすいように、証言者の写真をDVDから起こして加えました。最終的に収録順およびアイウエオ順に検索出来る仕組みを考え、誰にでも利用しやすいようにしました。また拡張性を考え、今後引き継ぐ人が利用しやすいように

最もポピュラーな計算ソフトEXCELを使用しています。

成果物は事務局に紙のファイル及びデータの形で收藏されています。また、収録した映像のDVDと証言の文字起こしファイルも既に202名分完備しており、会員の閲覧は可能です。

さらにこれを利用して、内容の分析にも若干手をつけています。証言者の属性別に、例えばドラマ制作者、ドキュメンタリスト、アナウンサーなどに分類。男女比、出身母体、証言内容なども可能な限り区分けしています。

丹羽研究室との接触

ここまで進めた上で、出版の実務作業を担うパートナーとして、東京大学大学院の丹羽研究室に共同作業の可能性を打診しました。丹羽准教授はかつて「証言」について放送人の会や放送文化研究所と協働していた石田教授から全データを引き継いでおり、話はトントン拍子に進みました。既に学内の審査を通り、日本学術振興会に科研費を申請する段階に入っています。認可が降りれば来年3月からデジタルアーカイブの制作にとりかかる予定とのことです。

ただし、話合いの結果、丹羽研究室が担当するのはデジタルアーカイブの構築であり、書籍の形で出版する為のパートナーは現在未定です。全集の体裁をとった出版はかなりハードルが高そうです。むしろテーマ別の研究書としての出版であれば東大出版会の協力も可能と考えています。

余談ですが、丹羽研究室に残されていたもの及び、放送文化研究所のものをつき合わせた結果、全てのデータが揃い、当初の散逸の懸念が払拭されました。

今後必要な作業

200名のデータは揃いましたが、出版社の選定もさることながら、個々の証言を吟味すると膨大な作業が残されていることが分かります。最終ゴールまでは会員の皆さんの多大な協力を仰がなくてはなりません。まず、証言者の生年月日を含む略歴にかなり不備があります。何らかの方法でこれを埋めていく必要があります。

二つ目は語られている内容自体の真偽を確認しなければなりません。本人の記憶違いを放置するわけにはいきません。

三つ目は部外者にとっては説明を要する事項に注釈をつけなくてはなりません。既にこの作業は進められていましたが、追いついていません。誰がどういう形で行うのか、要検討です。

四つ目は証言内容に問題がないかのチェックです。個人的な印象や批判など、読み手の目に触れる場合に問題となる部分も多々あります。この扱いを吟味する必要があります。

もちろん何よりも重要なのは出版社の選定です。前述の様に、東大出版会を含め複数の可能性を探らなくてはなりません。皆様のご協力を願う次第です。

その為には、この素材をどう成果物として具体化していくかのアイデアを求めてブレインストーミングをしたいと考えております。全証言を全集としてまとめる以外の利用方法もあり得るでしょう。多くの方に是非参加いただきたいと思えます。

また、その結果も含めてパンフレット形式のプロモーション用素材を作成し、マスコミ・制作会社・研究者など各方面に配布して、商品として関心を示してもらえれば、感触を探らなければなりません。出版社を動かす材料としても必要となるでしょう。

新たな提案

直近の理事会で話題となった、放送人の会
他の事業との連動も「証言」の新たな利用法
として浮上してきました。具体的には、

●「人気番組の舞台裏」「放送人グランプリ」

「下キュメンタリーワールド」との有機
的連携の可能性を探る。例えば、新たな証言
者の選定にあたっては「放送人グランプリ」
の受賞者を対象とし、公開の場でその証言を
収録していくということも考えられる。

また、「証言」と番組アーカイブとの組み
合わせにより、放送100年に向けた息の長
い企画もあり得る。放送番組センターとの共
催も視野に検討する。(NHK「アナザース
トーリー」での「岸辺のアルバム」と堀川と
んこう氏の証言は好例である)

上記はいずれもドラマ・バラエティ・ドキ
ュメンタリーのジャンルを超えて可能であろ
う。ある意味で「名作の舞台裏」などは「放
送人の証言」そのものとも言えるのだから、
いわゆる「コラボ」の可能性はいうまでもな
い。

●「全集」以外の専門書 研究書あるいは単
行本としての展開を探る。東大出版などへの
企画プロモートをする。後述の資料2の証言
内容には考えられる素材が多くあるが、ついで
に。(例：「CIEが日本の放送に与えた影
響」「初期のテレビ制作現場の実態」「民放設
立とネットワークの形成」「バイオニアとし
ての女性放送人」等々)

今後の展開

200名を超えた現在、「証言」収録は新た
な段階に入っています。これまでは放送の過
去を中心に語られてきました。これからは現
在、そして未来を証言していただくべきでし
ょう。収録チームのチーフ工藤英博氏は明確
にそのことを意識しておられます。前述の様

に「放送人グランプリ」の受賞者を収録の対象
として定例化していくのも、放送の今を語る
上で、また放送人の会の事業の新たな、そして
有機的な展開として有意義なことと思われま
す。

放送人の会の会員には現役を離れた方も多
いと思われまます。しかし「証言」のいわばリニ
ューアルは、そういった会員が現在の放送現
場を追体験して新たな知見を得ると同時に、
自らの経験を有効に活用する場としても意味
を持つのではないのでしょうか？ それは放送
人の会自体のリニューアルにもなると思いま
す。「日韓中テレビ製作者フォーラム」から離
れた現在、放送人の会のパワワーの新たな展開
の場としたいものです。

参考資料1

これまでの証言者とその収録順に示しま
す。参考までに辻、作本両氏の収録は199
9年4月7日、直近の橋本佳子氏は2020
年9月27日です。判明しているだけでも物
故者が3割をはるかに超えており、その意味
でも貴重な資料であることが分かります。収
録日時等は放送人の会会報バックナンバーか
らも検索可能です。(全202名)

辻 好雄、作本 秀信、高橋 太一郎
岡本 愛彦、吉村 繁雄、藤倉 修一、
西沢 實、長沢 泰治、北川 信
八橋 卓、浅田 孝彦、秦 豊、関谷 則
島地 純、津田 昭、蟻川 茂男、
加藤 静夫、大山 勝美、橋本 潔
小倉 一郎、石井 ふく子、川口 幹夫
川野 楠巳、荻野 慶人、山本 隆則
小川 秀夫、堀江 史朗、和田 勉
嶋田 親一、澤田 隆治、松本 明
川竹 和夫、フランク馬場 岡田 太郎

香西 久、鈴木 道明、原田 庸之助
村上 七郎、森川 時久、柳澤 恭雄
中道 定雄、田 英夫、佐藤 年
国枝 忠雄、田中 亮吉、高橋 啓
池田 義一、合川 明、久野 浩平、
齋藤 守慶、宇野 昭、大友 虎勝
武谷 雅博、吉本 琢也、石川 純昌
岩井 禮周、深町 幸男、吉田 直哉
津川 溶々、岸田 功、遠藤 利男、
沖野 暎、村木 良彦、真船 禎
武 敬子、新井 和子、太田 泰子、
近藤 晋、近藤 康弘、北代 博
村主 彦、川平 朝清、香川 宏、
横澤 彪、藤井 潔、吉川 史弘、
岩崎 英雄、大和 定次、土居原作郎
山内 久司、野添 康男、末次 撰子、
福富 哲、小田 久栄門、坂上 建司
吉村 光夫、石井 康博、池田 徹朗
磯村 尚徳、山崎 俊一、清水 満、
木村 忠夫、菱田 市彦、石川 健太郎
木村 栄文、大場 正男、岡崎 栄
野崎 茂、大脇 明、井沢 慶一、
神山 繁、坂倉 孝一、原 恒雄
伊藤 豊、宿谷 禮一、小南 武朗、
守分 寿男、石橋恵三子、村野 賢哉
佐藤 秀山、吉澤 保、能条 三郎、
鴨下 信一、栃木 始、齋藤 暎
松尾 羊一、勝部 領樹、松本 忠久
大野木直之、戸国 浩器、山室 英男
牛山 剛、杉山 邦博、湯浅 正次
大越 幸夫、織田 晃之祐、富樫 直人
田原 茂行、金子 鮎子、磯野 恭子、
鈴木 昭典、山川 静夫、武井 照子、
後藤 美代子、滝 大作、井上加寿子、
渡辺 泰雄、青木 賢児、小林 俊一、
館野 昌夫、岡田 晋吉、池松 俊雄
齋藤 太朗、仲村 庄司、須之部淑男

相田 洋、宮本省一、藤尾 孝、
葛城 哲郎、寶官 正章、金森 千栄子、
田原総一朗、廣瀬 嘉夫、鈴木 健一、
藤竹 暎、兼高 かおる、後藤 亘、
今野 勉、寒河江 正、植村 頼音、
野崎 元晴、市岡 康子、竹内日出男、
熊沢 敦、日枝 久、縫田 暉子、
鈴木 健次、亀淵 昭信、若生 豊隆、
久能 靖、安間 総介、石橋 冠、
内山 洋道、中島 克彦、伊藤 隆徳、
玉井 賢一、松前 洋一、藤久 ミネ、
杉田 成道、橋本 洋一、齊明寺以玖子、
堀川とんこう、佐々木昭一郎、氏田 宏、
鶴橋 康夫、大治 浩之輔、河野 祐一、
飯島 敏宏、露木 茂、杉山 茂、
皇 達也、北山 章之助、重村 一、
小林 由紀子、加賀美 幸子、小澤英輔、
吉岡雅春、工藤英博、村上雅通、山田良明、
中尾幸男、橋本佳子

参考資料2

主な証言内容を短くまとめてみました。い
ずれも複数の証言者が発言しており、立体的
な分析が可能となります。分類はあくまで一
例であり、異なる視点からも項目を立てられ
ることは言うまでもありません。

戦前・戦中の放送

通信省情報局監督下のNHKの状況。大本
営発表や終戦の詔勅の放送など、現場に立ち
会った人達の生々しい証言。

占領下の放送

CIE(連合国軍民間情報教育局)のフランク
馬場をはじめ、その職員として雇われ、その後
日本の放送の発展に関わった人々の証言。占
領軍のNHKに対する検閲や指導の実態が語

られている。

沖繩の放送の変遷

川平朝清氏が戦中から戦後、そして現在に至る沖繩の放送の変遷を概観する。沖繩返還の裏面史的要素もある。

街頭録音が伝えた戦後日本

それまでアナウンサーの声だけを伝えていたラジオから、庶民の肉声が聞こえてきた。ダンスケを手に戦後の街の風景を伝えた人たちの証言。

初期のラジオドラマとその完成まで

既製の演劇を放送用に直した台本から次第にオリジナルへ。放送劇団の創設、堀江史朗が捕虜時代に触れたノーマン・コーウインの影響など。

ラジオ番組の変遷と「ラジオ論」

新しいメディアに当代最高の作家、音楽家などがそれぞれの理想を実現していく姿、聴取者との関わりなどが産む新しいラジオ論の展開。

街頭テレビの実態

集まった人数を毎日集計し社長に報告。視聴率ではなく視聴数を把握した。新橋ではたった1台を1万人が視聴。直接担当者の生々しい証言。

初期のテレビスタジオの混乱

失敗の数々。演出・技術・美術そして出演者の涙ぐましい工夫と努力。狭くて暑いスタジオから怪作、傑作を生み出した人達の懐旧。

テレビと映画、そしてテレビ映画の関係

「電気紙芝居」が映画に追いつくまで。映画の人材がテレビに流れていく過程。そして「テレビ映画」というジャンルを確立した人達。

東京と大阪の張り合

NHKして民放も含め、その文化的背景から大阪局と東京局には対抗意識があった。双方を経験した人たちの比較論が語られる。

レッドパージと人材の拡散

レッドパージによりNHKを追われた人材は開局ラッシュに沸く民放に活躍の場所を得ることが多かった。岡本愛彦ら当事者たちの証言。

民放の発足とネットワークの形成

昭和20年代後半から民放が次々と発足し全国に及ぶ。さらにニュース・番組交換等の必要からネットワークを形成していく過程を当事者が語る。

大河ドラマなどテレビドラマの興隆

映画の影響を離れてジャンルとして確立し、技術革新もあいまって発展していく姿を、名だたる演出家・プロデューサーが生き生きと再現する。

テレビドラマの演出論

名作を世に出した人々がテレビドラマに賭けた情熱、そこに見出した自己表現の手段、理想追求の方法などを語り尽くす。

カラー化・衛星放送・VTR導入・機材小型化等、放送技術の発達

NHK技研、民放の技術者達による機器開発の歴史の証言。現場からの要請にどう応えたか。技術が番組自体を変えていく過程が興味深い。

照明・美術・音響効果のプロ達

先人無き現場での工夫の数々、機器開発との協業。そして名人芸を引き出していった演出家達との関係など、当事者ならではの具体的証言。

報道番組の発達と事件事故イベントの報道

皇太子ご成婚、東京オリンピック、ケネディ暗殺、あさま山荘事件、日中国交回復など、時々の放送自体を変えていった事象に立ち会った人々。

テレビジャーナリズム・ドキュメンタリー論

激しく変わりゆく世界の動きを、新聞から

の受け売りではなく自分達の言葉と映像で伝えるべく、そのスタイルに磨きをかけた放送記者魂。

ワイドショーのスタートとその全盛

ラジオ・テレビが生み出した独自のジャンル「ワイドショー」。その生みの親、育ての親が語る実態。いどつた「キヤスター」たち。

アナウンサーからキヤスターまで、その仕事の広がり

単に原稿を読む人から語る人、さらに全体を統括していく人へと広がっていく役割。旧弊を打破して新しいスタイルを確立した人達の証言。

初期の紅白歌合戦そして音楽番組の変遷

ラジオとテレビが生み、育てたスターたち。音楽業界との関わりなど、常に音楽番組の中心を占めていた音楽番組の変遷。

オリンピックを契機とするスポーツ中継の発展

相撲、野球を中心に発達した日本のスポーツ番組。それは東京オリンピックを境に劇的に変わっていく。その変化に立ち会った人々の証言。

科学・教養番組・歴史番組の発展

当初の専門番組が、報道と結びついて表現力を高めて行く過程。CGの発達でエンターテインメントとして充実して行く歴史番組の開発者達の証言。

作家・俳優・著名人たちのエピソード

ラジオ・テレビをいどつた様々な人々に放送人はどう接していったか。悲喜交々のエピソードと、彼等による人物評の数々。

番組制作会社設立の事情、その発展

ドラマ、ドキュメンタリー、音楽番組などの制作会社がどのようにして誕生していったか。放送局との関係などを当事者が語る。

女性放送人たち

アナウンサー・プロデューサー・演出家・ジャーナリスト・カメラマンなど、女性として初めての道を切り拓いた人達が、その仕事を、パオニアとしての苦勞を語る。

参考資料3

証言の一部を参考までに抄録してみました。個々人の語り口が、それぞれの時代の雰囲気を生き生きと再現してくれます。写真はいずれも収録時のものです。聞き手と収録年月にも注目です。

蟻川茂男 ドラマ演出家

(聞き手：堀川敦厚) 2011年9月6日収録



妙な因縁だけれども、朝鮮戦争だよ。それであつたという間に儲かるということになって、いつの間にかテレビを始めようと。テレビの免許が下りちゃって、そのときはもうみんなラジオの方が居心地が良くなっちゃって、テレビへ行きたがらなかったね。

加藤静夫 照明家

(聞き手：大山勝美) 2001年9月12日収録



技術なんてどっちみち進歩するだろうと。だからそれにこだわってテクニクを抑えてしまおうとそれなりなことしか出来ないから絶えず挑戦していくという、破壊するところから始まるような自分なりの理屈をつけてですね、

大山勝美 ドラマ演出家

(聞き手：久野浩平)

2001年9月19日収録



寺山修司とか、大江健三郎さんのをやったりね。だから文化人、文学者が非常に、テレビっていう新しい表現媒体に興味を示してくれましたね。(中略) そういうふうに、その文芸ものが、企画が通っていたんですね。ですからそれをちゃんと受け止めるお客がいたっていうこと。

橋本 潔 美術家

(聞き手：久野浩平)

2001年12月25日収録



「実はNHKには、あの、音の技術者が、表現者が、ごまんといます。しかし、絵を作る技術者は一人もいません。もしよかったらラジ

オを絵にしてくれませんか」って、これは僕がすごく印象に残っているんですね。

澤田隆治 バラエティ演出家

(聞き手：松本 明 久野浩平)

2002年3月29日収録



アチャコさんの人気番組の「アチャコ青春手帳」にしろ何にしろ、全部日本をこまめくりながらやって、(中略) アチャコさんがしゃべってる、浪花千栄子さんが横へ出てきて、自分のもとになったらしやべって、終わったら次の人が出てくるわけだから、これでどうして客笑うんだらうって、今だに不思議だね。ラジオの公開放送にあれぐらい人が集まったっていうのは。

川竹和夫 放送記者

(聞き手：野崎 茂 久野浩平)

2002年7月5日収録



7月の5日に最初のレッドページがあつて、7月に大阪が先で、その次東京なんですけど、東京でね、放送会館の入り口にある目突然張り紙が出ましてね、「次の者入るべからず」と。

(中略) MPというのがやって来ましてね、そして荷物出すのをこまめに見て、早く出ていけというのをやりましたよ。

青木賢児 ドキュメンタリー作家

(聞き手：隈部紀生)

2009年3月24日収録



非常に固定化された単純な社会観では、その社会が変転していくのになかなか追いついていかないし、あるいは視聴者に共感を持って見ていただけないというようなこともかなり深刻な問題として生まれてきたと思うんです、最初のころ求めていた戦後すぐの時代と、それからある程度豊かになって、さらにもっと豊かになった時代がドキュメンタリー、あるいは社会番組に求めるものはまったく違ってくるという感じが非常に強くなります。

兼高かおる 旅行家

(聞き手：今野 勉)

2011年4月27日収録



ブラジルで、えー、私たちについてくれたガイドは日系の若い男性。進駐軍で日本に来てたことがあるんですね。ですから日本が負けたのは知っているんです。ところが、日系の年

配のかたは日本が負けたとは思ってないわけ。それで、あの、私たちが取材に来たっていうと「日本からよく来た」。そしてそのガイドに言うんですね。「見なさい。日本はこういう強い国だ」。アメリカの飛行機使つてね。ブラジルまでテレビを撮りに来る。

荻野慶人 ドラマ演出家

(聞き手：大山勝美 久野浩平)

2002年3月29日収録



だから大阪はドラマに転向した芸人さんがずいぶん多いんですね。ところが最近ドラマがないから、みんな本業の落語や漫才ではなくて、トークショーとかバラエティショーに出ています。それこそさんま、文珍、三枝から引退したけど上岡龍太郎と、全てみんなトークの方に行つたでしょう。当時だったら僕は喜んでドラマに出てもらっていますね。

後藤 巨 東京MXテレビ代表

(聞き手：武本宏二)

2011年4月28日収録



あの、それを、見えるラジオを、カシオ製のやつを持って、僕はね、井深さんのところに行

くんですよ。ね、(中略)したらベッドから
こう、起き上がってくれてね、いじってね。「面
白いの、後藤さん作ったな。これはな。」

田英夫 キヤスター

(聞き手：大山 勝美)

2002年11月28日収録



ベトナムの人たちが激しい戦争をしながら
も毎日の生活は爆撃機が来ると警戒警報が出
て、すると、街に一人もいなくなる。それが、
空襲警報が解除になると5分後には街に人が
あふれてるっていう。それで、市場なんかも人
がいつぱいいるという、それが生でカメラで
とらえられるんですからね。そこは、本当にテ
レビならではのものと思えましたね。

鴨下 信一 ドラマ演出家

(聞き手：伊藤 雅浩 久野浩平)

2007年1月12日収録



テレビの歴史を一口で言えってたら、テ
レビの中に出てくる人の人数が増えたとて、
最大のごとでしょう。一部の人しか出られな
かったテレビに、こんなに人が出て、こんな

に見て、それは娯楽にならない、なりません
よ。僕はテレビが芸術にならなくなったとか、
社会的な機能を失ったより、もっと大きなこ
とはテレビが娯楽にならなくなったことだと
思う。

村主 彦 スタジオカメラマン

(聞き手：八川 明 各務 孝)

2004年6月3日収録



長谷川一夫さんが一番最初に技術スタッフ
を集めて、私はここにこういう傷があります
から、明かりはこう、これをフォローするため
の抑えの明かりをお願いしますって。2日間
カメラテストをやって、衣装テストをね、カッ
ラとね、2日間やりました。

藤井 潔 ドキュメンタリー作家

(聞き手：久野浩平 野崎 茂 各務 孝)

2004年10月28日収録



「NHK特集」はNHKの中で、何十年に一
度起こった出来事だと思っています。それは
何も面白い番組ができたというのではなくて、

組織が変わったんですね。つまり、参加する制
作者の意識が変わる。それから総務や経理が
ありますよね。そういう人たちがテレビの放
送を出している、という喜びみたいなもので、
変わってくるのを感じられたんですね。

磯村 尚徳 放送記者 キヤスター

(聞き手：久野浩平 各務 孝)

2005年6月14日収録



本当にテレプロンプターを使わないで自由
闊達にやっていたのは、最盛時の久米宏さん
とか、最近の筑紫さんとか、そういう人であっ
て、NHKでは私以後まず、残念ながらこれだ
けは空前絶後で、私の前にもそれはいないし、
後でも、原稿見ないでしゃべるといふ人はま
ずいないと思いますね。

藤倉 修一 アナウンサー

(聞き手：各務 孝)

1999年10月22日収録



だからこそ、新聞記者の方に、藤倉さんあな
たのやった番組でなにか一番面白かったとい
うから、「紅白歌合戦」よか、「千の扉」とか
いうでしょうけど、僕は「社会探訪」が一番面

白かった。やりがいがあったと思うんですけ
れど、本当に。そのかわり、訴えられたことも
ありました。…

野添 泰勇 ドラマ演出家

(聞き手：荻野 慶人 久野浩平)

2005年3月8日収録



ビデオテープがね、横浜港へ第一号で陸揚
げされたものが大阪テレビへ来たんですよ。
2台入って、1台を大阪に、もう1台を東京に
置いてあった。当時もう既に放送が始まって
るTBSとか日テレの番組を録画して、その
テープを大阪に送り、大阪でそれを再生する
という。

浅田 孝彦 モーニングショーP

(聞き手：久野 浩平 野崎 茂)

2001年1月26日収録



モーニングショーの話になりますけれど、
やらなければならないと思ったのは、それは
ヴィックスのピーターソンから、こういう月
曜から金曜日までの1時間のワイド番組をど
こかでやらないかという話が私のところへ飛
び込んできて、それはと食いついたわけ。

末次 櫻子 教育・教養番組PD

(聞き手・荻野 慶人 久野浩平)

2005年3月8日収録



島津貴子さんが結婚して新婚旅行を、瀬戸内海を行く関西汽船のくれない丸の上から中継放送をする。この企画から、交渉から、実現させるまで、あれはかなりのいい仕事だったと思います。

木村 忠夫 カメラマン

(聞き手・大山 勝美)

2005年6月17日収録



本読つて大事ですよ。ツーショットでもね、背中からね、全然向こう側の人間の顔も見せないで、あの、タレントの背中の中のアクションだけでね、セリフを言ってるわけで、それでカメラをどっちかにトラックして初めて相手が見えるとかね、本読しているうちに想像できなくなるじゃないですか。

今野 勉 ドキュメンタリー作家

(聞き手・松尾羊一 荻野 靖乃)

2011年7月15日収録



いままでラジオにもテレビにも出なかった人たちが、だんだん普及するにつれて画面に登場してきて、日ごろの生活の延長でいろいろなことをしゃべったり踊ったりするようになった。その実像を見た知識階級が庶民ってこんなものじゃないと言っけど、実際はテレビが初めて日本の本当の大衆を映し出したというか、僕は僕が知っている大衆が初めて出てきたという感じがしたんです。

御挨拶

「証言」収録チームに加わって

千葉 邦彦

「証言」出版プロジェクトには以前より身を置いていましたが、この夏、「証言」収録チームにも加わりました。最初の仕事は、公益財団法人放送文化基金からいただく助成金の申請でした。この助成金によって収録活動は支えられています。

私はこれまで、『20世紀放送史』(2000年刊行、NHK放送文化研究所)の編集・執筆(放送史上重要な人物の証言収集を含む)やNHK放送博物館に於ける歴史展示(II放送史と放送文化財の対応を分かりやすく整理して公開する仕事)、放送文化講演会等の記録の公表などに携わってまいりました。個人でも放送史に関する執筆活動を続けています。これらの経験を収録や出版に少しでも生かせたいと思っています。

新しいステージに向かつて

「放送人の証言」200人超えに想う

工藤 英博

先人たちから受け継がれてきた証言の節目になる200番目の証言者は、山田良明さん(今年2月収録)。いみじくも、今年の「放送人グランプリ」のグランプリに選ばれた「フジテレビヤングシナリオ大賞」(1987年創設)の企画書を書いたのが山田さん。

当時のフジにはよい脚本家になかなか来てもらえなかったので、我々のパートナーになれる脚本家を発掘して育成しなければ、とコンクールを企画した。羽佐間社長に直接掛け合って、開催ごとに1千万円の予算を即決して頂いた、と当時を懐懐している。

ヤングシナリオ大賞は、第1回受賞の坂元裕二さん以来、野島伸司さん、野木亜紀子さん、安達奈緒子さんなど、多くの実力ある脚本家を輩出し、33年間に渡ってドラマ界に貢献してきている。

山田良明さんに続いたのは、コロナの長期化で延期せざるを得なかった中尾幸男さん(6月収録)、橋本佳子さん(9月収録)で、ご協力に心から感謝を申し上げます。

中尾さんは、電通ラ・テ局時代の証言が庄巻で、その一端がニュースステーション誕生秘話。久米宏さんの事務所社長から「私の夢は、久米さんに月々金のベルトで報道番組をやってもらおう」という話を聞いたことが出発点。電通に任せてもらうことになったが人生の大仕事だった。22時台(月々金)のベルト編成では、どの局も乗ってくれるはずもなく、唯一テレビ朝日がプレゼンに応じた。しかし、金曜は朝日放送の枠があり、交渉は難

航を極めたが、マーケティングを導入した綿密な計算と大胆に創ることで実現の運びとなった。初めて報道番組に制作会社オフィス・トウ・ワンが本格的に加わった。「証言」収録当日、分厚い手書きの企画書を持参してくれた。続いては直近に収録した映像プロデューサー橋本佳子さん。証言の始まりは、大学卒業後TBS報道局でのアルバイト時代に遡り、新聞の切り抜きやコピー、お茶汲みなどの補助的な仕事の日々。学生の頃から芝居にのめり込んでいた橋本さんは、仕事の合間に小劇場の舞台演出や女優としても活動していて、将来は舞台の演出家を志していたなど証言の発端は予想外だった。出来上がった証言の映像を見るのが楽しんだ。

今年も橋本さんは盛んなプロデュース活動をされていて「羽仁進の世界」、「コロナに揺れる多国籍タウン」、「大林宣彦から4人の監督へのメッセージ」と立て続けに優れた3本の商品がNHKで放送された。

改めて200人の証言者を調べてみると、放送の草創期から興隆期にかけて開拓や革新などに関わった先人たちは、その出身母体、ジャンル、職種などでバランスを欠く点もあるが、概ね網羅されていると考える。

証言者が200人を超えたことを契機に、新しい視点で地上波は勿論、BS、CS、WOWW、地方局発、配信なども目を向け、年代、年齢、分野に限らず広範囲に証言対象者を求めていくことの詳細を、現在証言チームのメンバー全員で検討している。つまりは、放送の開拓から、次なる「発展」へ寄与した対象者を新しいステージに迎える意気込みで…。

そして、今日の状況下で「放送人の会」の諸活動のコロナレーションについて、その可能

性を真剣に考えるべき時だと思ふ。先日の理事会で、主な活動チームの連携と効率化などを模索する、様々な議論が交わされたことは重要な意味を持つと思ふ。

コロナ禍でもネガティブにならず、厳しい状況をテザインで逆手にとつて、付加価値に変えようとする前向きな努力が求められていくと思ふ。今まで見えなかったものが、コロナで見えるようになるかも知れず、停滞する今こそ協力的体制で立ち向かわなければならぬと思ふ。

思わずニヤツとするエピソード

加藤浩紀

「放送人の証言」は口頭で語られたものが、それを文字にして注釈を付けながら出版のための準備としての校訂作業を進めている。私には、その作業をしながら、ついニヤツとしてしまう瞬間がある。それほど重要な話ではなくても、証言者が何気なく語ったエピソードに、私の気持ちがザワザワと揺らぐことがあるのだ。その一つの例として、元NHK水中カメラマンの河野祐一氏の証言を紹介しよう。

一九六六年、札幌発東京行き全日空機が羽田沖で墜落する事故が起こった。その時河野氏は同僚の竹内庸夫カメラマンとチームを組んで海に潜り、海底のヘドロの中に横たわる機体の残骸に記された「All Nippon Airways」のマークを撮影して、墜落が紛れもない事実であり、機体の散乱した状況から乗客乗員は絶望であることを確認した。そして、河野氏は、その日の夜七時のニュースで映像を見ながら海底の様子を報告した。

この頃の撮影はもちろんフィルムである。潜水撮影と言っても機材は乏しく、経験者も

少なかった。その意味では、この全日空機墜落事故の特ダネ報道は、潜水撮影の重要性をテレビ界全体に知らしめることになり、エポックメイキングの事件報道だったと言える。

河野氏はその後、オホーツク海や南水洋などで大型下キョメンタリーの撮影を担当するかわら、機材の開発や後進の育成にも取り組んだが、それは「放送人の証言2018」の記録に委ねるとして、ここでは、私がニヤツとしたエピソードを紹介しよう。

藤沢に住む河野氏と逗子に住む竹内氏は、仕事を終えて帰る時に、当時のNHKの最寄り駅であった新橋で東海道線か横須賀線に乗って大船まで一緒に行き、そこで別れるのを習慣にしていた。この特ダネの水中撮影に成功してニュースでリポートした日は「きょうくらいは奮発してグリーン車に乗ろうぜ」とグリーン車に乗ったという。このときは河野氏も竹内氏もまだ二十歳代である。自分で自分を奢める。褒美がグリーン車とは、なんと慎ましいことか。その初々しさに私は思わずニヤツとってしまった。

なお、このあと大船駅でサヨナラを言って別れようとしていた二人に、突然他のお客さんから声が掛かった。「さっきテレビに出ていましたね。とてもよかったです」と言っ、駅のホームで拍手をしてもらったという。河野氏は「新婚旅行の万歳ならまだしも」と言いながらも、「あんなうれいことはなかった」と、五十余年前を率直に振り返った。

「放送人の証言」は、放送の歴史を研究する人たちには、真に貴重な資料となるだろう。また、これから放送の世界を目指す若者たちにとつては、大先輩が目指した志や達成感ときには挫折にさまざまなことを学ぶであろう。「放送人の証言」の収録に何度も携わって

きた私としては、証言を単なる研究材料とするのではなく、「ニヤツとするエピソード」の中から証言者の息遣いを感じ取っていたとき、テレビ・ラジオの世界の面白さ楽しさを更に膨らませてほしいと、私かに願っている。

「放送人グランプリ」の今後に向けて

放送人グランプリチーフ 西村与志木

2002年（平成14年）に始まった「放送人グランプリ」も来年の2021年には20回目を迎えます。受賞者の一覧を見るとその時代の放送をリードしてきた人と作品が選ばれており、改めて「放送人グランプリ」という賞のユニークな存在意義を感じます。私が選考委員長となつてから五年がたちます。今年、亡くなられた前選考委員長の堀川とんこうさんからの就任の依頼でした。この五年間を振り返りながら今後のグランプリの在り方について少し考えてみたいと思います。

私が最初に選考委員長を担当した2016年の授賞式の会場は南青山にあるNHK青山荘のホールでした。「放送人の会 総会の後、机と椅子を片付け模様替えて立食パーティの会場としてから授賞式を始めました。会場のキャパシティーとしては最大でも150名程度でしたので、受賞者と会員を合わせるとちょうどいいになる感じでした。翌年の2017年から青山荘が使えなくなり会場を千代田放送会館のホールに移して授賞式を行うこととなりました。このホールは非常に立派なホールで照明や音響など設備も整っており、会場のキャパシティーとしては椅子

で300名以上はあると思います。しかし参加者は受賞者および総会参加の会員ですので150名を超えることはなく、授賞式もがらんとした感じは否めません。しかし毎年の恒例となつている贈賞にあつた選考委員の心のもつた講評とそれに対する受賞者のスピーチにも感動します。もつと多くの人とこの感動を共有したいという思いを強くします。理事会でも「放送人グランプリ」の授賞式に参加者をもつと増やせないか、その為にももつと少しマスコミにも取り上げてもらえるようにできないかなど議論されてきました。

しかし総会直結で授賞式が行われるため他団体や一般の人たちを呼び込むことがなかなか難しいというのが現状です。ギャラクシー賞やプロデューサー協会のやっているエランドール賞のように単独のイベントでやるのか、「名作の舞臺裏」や「人気番組メモリー」や「放送人の世界」などイベントと合わせて「放送人グランプリ」授賞式を開催するなどという案もあります。故・堀川とんこうさんは選考委員長の時「無理して授賞式の規模の拡大を目指すことはない。量より質だ。それよりもいかにして毎年、受賞する作品や人の選定のレベルを保つていけるかだ。選ぶ側も試されている」とおっしゃっていたことを覚えていきます。

新型コロナウイルス感染拡大を受けて2020年の選考委員会は開かれず書面によるやり取りでグランプリおよび他の受賞作品を決定しました。また例年、5月に行われる授賞式も行われませんでした。2021年の「放送人グランプリ2021」に向けてどのように変えていくのか、また変えないのかを論議していく時期にあると思ひます。

これからの放送人の会の会の活動イメージ コロナを越えて

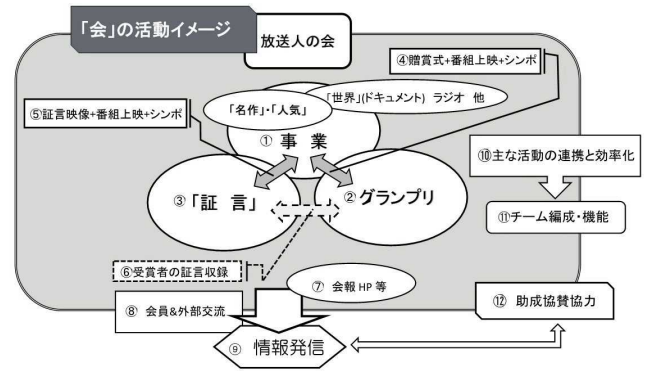
総務委員長 前川 英樹

10月3日の理事会で議論された資料です。今後の「放送人の会」の活動についてのイメージを表したものです。「放送人の会」は、会員の自主自立を原則として、色々な事業活動、会員活動を行ってきたことは、承知の通りです。その様子は、「会報」、HPで逐次公表してきました。しかし、近年放送を取り巻く状況は厳しく、これまでのような個人的人脈や会員の現役時代の実績を頼りにした方法では限界だという認識が担当理事だけでなく、何人かの会員から示されました。従来のボランティアな活動を現場に要請することは、ますます厳しい時代になっていると考えざるを得ません。その上、この一年間新型コロナウイルスの影響は、放送界においても様々な制約が生じていることは、承知の通りだと思います。「放送人の会」の活動にも大きな影響があり、公開企画は実施困難です。自由な発想の原点である会員相互のリアルな会話の機会も減っています。それだけでなく、日常的な活動を支えている事務局機能にも支障をきたしています。因みに、現在事務局専従者の勤務は週一日です。こうした状況がいつまで続くのかは全く不透明ですが、会としては今後の活動の方向を企画と運営の両方から考えなければなりません。

そこで、全く任意の形で総務委員会をベースに一回、その上で会長を交えてもう一度、二度ブレインストーミング(プレスト)を行いました。その内容を私が図にしてみました。

この図の読み方は以下の通りです。

これからの「放送人の会」の活動イメージを□で囲みました。以下、各項目を○数字で表示



してありますので、それを見ながらお読みください。

- 1、会の活動の柱を
 - ・事業(名作、人気、世界、ラジオ、他) ①
 - ・グランプリ ②
 - ・「証言」(収録、出版、書籍、デジタルアーカイブ) ③
- この三つの活動を連携させるとすると、以下のようなタスクが成立します。
 - 1、事業×グランプリ 斜め右上に吹き出しとして図示しました。
 - 贈賞式+受賞番組上映+シンポジウム+懇親会 ④

「名作の舞臺裏」「人気番組メモリー」、その他いろいろな企画が該当するでしょう。

「地方局会員の情報交換」などもこういう関係で成立するでしょう。

- 2、事業×「証言」 斜め左上に吹き出しで図示しました。
- 証言映像の公開上映番組上映+シンポジウム ⑤

「放送人の世界ドキュメンタリーワールド」などの企画はここにも該当します。

- 2、グランプリ×「証言」 下方に吹き出しで図示しました。

具体的提案というところまで詰めて意見交換がなかったので、「例えば」として以下を例示します。・・・図としては点線表示にしてあります。

- 受賞者の証言収録⇒証言者の同時代化(コンテンツポラー化) ⑥
- ⇒制作現場の現在(ローカル局の制作環境、コロナ状況とプロダクション、etc)
- 3、以上について
 - ・「会報」HPで告知レポート⑦し、
 - ・会員交流+外部懇親を図ります⑧

こうして、外部に向けても情報発信を強化したいところ⑨

- 4、こうしたタスクを中心にした活動を基本的方向とすることで、各活動の連携と効率化を図る必要があります。⑩
- 5、当然、チーム編成やチームの機能を強化したいと思います。⑪
- 6、⑩の外部への情報発信と併せて、新たな助成、協賛、協力のパートナーにアプローチしてはどうでしょうか。⑫

10月3日の理事会では、出席理事全員からこれについて発言がありました。議事録をご参照ください。

今後は、会長が委嘱したメンバーにより具

体的な活動案を検討して理事会に提案し、理事のみなさんと議論することになります。以上です。どうぞ、会員のみなさんのご意見をお寄せください。

総務委員会から

総務委員会は、会の活動全般を把握し、円滑な運営に努める役割を担っています。構成メンバーは前川委員長、吉田、深尾、小川、千葉の各理事で、毎月最終水曜日の定例会議には、菅野理事(広報担当)、テーマによっては渡辺理事(事業委員長)にも加わっていただいています。ここでの議論は、理事会議案の基礎情報にもなります。また、放送人グランプリのような会全体で取り組む事業をはじめとして、諸活動に関するサポート事項を洗い出し、総務委員会と事務局の役割分担を確認します。

総務委員会では、理事会・総会の運営、理事改選、財務状況、重要な予算執行などについて委員全員と事務局が認識の共有につとめています。会の活動に関するご質問、ご意見、ご提言を総務委員会までお寄せください。(千葉)

☆おめでとうございます! ☆

今野 勉 会長

令和2年度の文化功労者に
10月27日発表。その業績を「テレビ演出家。84歳。テレビマンユニオン創設に参加し、既存の枠を超えた新たなテレビ表現を追求。長野五輪で開、閉会式のプロデューサーも務めた。北海道出身。」とある。なお、文化功労者は、文化の向上発達に特に功績顕著な者を顕彰するもので、11月4日東京都内のホテルで顕彰式が行われます。

特集「パンデミック」

パンデミックがこの会報にも及んでの特集。会員の何人かにこんな状況で何を、何を考えたか、自由に書いて寄稿していただいた。特集の中の「パンデミック関連番組」テレビ一覧は今年テレビが何を放送したかの重要な資料として「放送人グランプリ」の参考にしてください。

コロナ関連用語

伊藤雅浩

コロナと腰痛のせいではほとんど外出もせずぼーっと過ごしているうち、気がついてみるといろんな言葉がわからない。わからない言葉を調べてみるとコロナの何かがわかる気がしたので紹介したい。

Covid-19 coronavirus disease 2019 の略。

WHOの命名で、coronavirus は間を区切らず1語。中国での発生は2019年なので19である。最近新聞や雑誌の記事にこの言葉が何の説明もなく使われて、私は戸惑った。

感染症 感染の広がりや予防する必要がある。患者を病院などに隔離する病気をかかるとは伝染病と言った。私は子どもころ親戚がチブスで遊病院に隔離され、「伝染病だ、怖いのだ」と教えられた。その頃の法律は明治30年に制定された「伝染病予防法」で、現在の法律は平成10年に制定された「感染症の予防及び感染症の患者に関する法律」である。この法律が制定される少し前、ハンセン病患者の違憲訴訟があり、「らい予防法」は平成2年に廃止されたが、「感染症・法律」では前文に感染症の予防処置が人権侵害を起すことのないようにと高い調子で書かれている。非常に長い法律でよく検討された法律だと思ふ。「感染症」

という言葉の使用頻度の高さに私は違和感があったのだが、この法律をみて納得した。

PCR polymerase chain reaction DNAポリメラーゼという酵素の働きで少量のDNAを連鎖反応で対数級的に増殖させ、研究・分析に必要な量に増やす技術である。犯罪捜査の鑑識で微量の血痕などからDNAを鑑定するのに使われ、テレビのミステリーでもおなじみ。この検査は新型コロナウイルス以前にSARSでも使われた。

三密 密閉、密集、密接を避けると官邸・厚生省が掲げた標語。真言宗の身密(手に印を結ぶ)、口密(真言を唱える)、意密(一心に本尊を観念する)の三密を意識している。

ソーシャル・ディスタンス 他人との距離を2メートルほどあけて飛沫感染を避けようとする。世界で行われているが、日本では小池都知事がこの言葉を使い始めたといわれる。**ロックダウン** 封鎖、都市、地域、国などの封鎖があった。**トリアージ** Triage フランス語で選別の意。

戦場や緊急病棟への患者の搬送の優先順位割り当て制度。それぞれの患者に黒、赤、黄、緑のタグを付け、この色の順で優先搬送する。**プロトコル** protocol 本来は複数の者のやりとりでの意で、かつては外交儀礼、議定書の意

で使われることが多かった。最近ではIT関連で、パソコン同士のやりとりなど通信のルールを定めた規定の意で使われることが多い。医療の現場では順守すべき治療の手順の意で使われるのだが、コロナ対策の現場では、病院保健所、介護施設などの所管が国や地域によって異なり、患者の搬送や処置、隔離病棟の設置、費用の負担、事務手続きなどを定めたプロトコルが作られている。

ファクターX 山中伸弥教授の意見で、日本のコロナ対策は非常に緩い。しかし感染者の広がりは遅い。何故か。その理由をファクターXと呼んでいる。▼マスク着用、毎日の入浴など高い衛生意識▼BCG接種など何らかの公衆衛生対策▼これまでの何らかのウイルス感染の影響▼日本人の遺伝的要因、等々のファクターXを研究、分析することでより有効な感染対策を見出そうという。

ガバナビリティ governability 統治性と翻訳されている。Governable と形容詞で使われることが多い。占領地や植民地を支配、統治するにあたって、支配される国民が指図、規制を守って秩序ある社会を作ることができればガバナブルである。コロナ対策については政府、行政の指示、要請を国民が一致して守れるのかどうかということがこの言葉が使われている。ガバナブルであるかないかの理由についての研究、分析は文化人類学が民俗学の領域のようだ。

小学校の廃校

河野尚行

東北の宮古市と大槌町に挟まれ、リヤス式海岸に面した岩手県山田町、この町にある六つの小学校が、今年の3月31日に6校とも同時に廃校になった。その小学校の一つ山田町

大沢地区の大沢小学校の廃校までの一年をIBC岩手放送が記録している。都会への人口集中、出生率の低下、人口減少が日本の重大な課題の一つと、叫ばれて久しいが、毎年、何百という地方の小学校が統合で意識的に消されている。田舎へ行けば行くほど、へき地に行けば行くほど、小学校は地域の中心であり、運動会などの学校行事ばかりでなく、ムラの体育大会や盆踊りなどの行事、それに災害時の避難場所など、何かにつけて集落を結びつける要になっている。

山田町の大沢小学校は143年の歴史を刻み、地域の高台にあり東日本大震災の大津波にも耐えた。それに、71人もの生徒がまた在籍しているのに、なぜ廃校になるのか。

岩手放送の番組は、大沢小学校に昔から続いた全校生徒参加のミュージカル「海上光れ」、この海で生きる人々の心意気を描いた音楽劇を、学校が亡くなる時に、生徒全員で、どのように演じるか、超満員の地域の人たちの前で、明治29年の三陸大津波に触れた部分をどう扱うか、それを巡って進行する。表向きは廃校になる悲しみは唄っていない。だが、集落の人々の表情に十分それは読み取れる、

やがて閉校式を迎える。これを機会に教師を辞める先生が生徒に向かい「町の学校に行っても、あなた達は、大沢の子どもである事に誇りを持ち続けて下さい」と言い、閉校してがらんとした教室に、ミュージカル「海上光れ」の唄声が繰り返し、繰り返し流れる。

「知恵を出せ大沢の子、広い海をかけ巡れ、小さくても海さかえろ、約束するぞ、見てろ！大沢生まれだもの。大沢さ、生まれだもの。」

小学校が消えた山間部の多くの集落は、限界集落の道を辿り、やがては消えて行く。その昔、私が取材した北海道の戦後緊急開拓集落

の場合、除雪費など集落への行政費が膨らむと、自治体はまず、小中学校を廃校に追い込む理由は、子弟には町のより良い教育環境をと思う。すると数年も立たないうちに、全戸離村集落は瞬く間に元の原野に戻ってしまった。

昭和の町村合併 平成の町村合併でも、多くの小中学校が閉校になった。私が卒業した村の中学校も、昭和の大合併で、村が隣の町に吸収合併されると、瞬く間に木造の校舎は解体され、無くなってしまった。

明治の初めに小学校の設置が決まった時、どの集落からでも、子供の足で15分程度で通えるよう、そのロケーションにも配慮した。日本の人口が現在より3分の1にも満たなかった明治19年に、全国の小学校の数は、今より7000校以上多い、2万6000校に達していたのである。

今でも、時たまに東京の朝の満員電車に乗ることがある。エリート校のランドセルと制服を身に付けた小学生がみくちやになりながら通学する姿を見かけると、あの大沢地区の小学生たちは、町の中心地にある山田小学校まで、どのくらい時間をかけて通っているのだろうか、ふと思っ。

コロナのせいで…

佐々木彰

毎朝、犬の散歩中に、野良猫の世話をしているボランティアのおばさんと世間話をする。これが結構示唆に富んで面白い。雨の日も風の日も休むことなく毎日野良猫を追いかけて、避妊から治療、葬式迄面倒をみる。

頭が下がる思いだが、そのAさんが、認知症の母のお見舞いに実家の富山に帰郷しようとしたら、兄弟たちから『東京の人は来るな』と言われたと嘆いていた。

その地方では、京都の大学にいた娘が帰省した後にコロナ感染がわかり、両親が離婚、母が自殺した悲劇があったという。どのような非難がその両親に襲い掛かったか想像するしかないが、似たような話は、沢山起きていると思われる。非国民呼ばわりされる戦前の一億総動員に戻ったかのようだ。

コロナは、社会の矛盾や人間の本性を明らかにさせている。マスクをしないと殴られ、入店を拒否したらSNSで糾弾される。妙な正義感を社会正義と思い違い攻撃的になっている。建前や綺麗ごとの押し付けが人間の分断を進めていないか。

低レベルなアメリカ大統領選も、コロナで分断を極めている。無謀だが本音を連発し感性に訴える明快なトランプに対し、民主党バイデンは当たり前綺麗ごんに過ぎて面白くない。トランプの危険性を追求するのに建前だけでは大衆を掴めない。

日本では、本音が隠される。日本学術会議の任命拒否の理由を、菅総理は言わない。政権に非を唱えた学者たちへの見せしめと言えるわけではない。日本学術会議の本来の姿など改めて検討するなど建前、綺麗ごとの進め方に狡猾でずるい違和感を持つ。

誰でも本音と建前で生きている。どちらかに偏るのではなく、その間を彷徨い、曖昧に流離っていく。いい加減と言われても、マスクをしていない人を見て殊更追求するのではなく、人それぞれと思っていこう。

ロケのできない制作がもたらす

もの

新山賢治

NHKの「視点・論点」という解説番組を受

託制作している。有識者や市民にスタジオに来てもらい、自身の研究や意見をカメラに向かって述べていただく番組で、10分間ほとんど1ショット一人語りのシンプルな番組だが、貴重な時間を生み出す可能性があると思つて制作している。このささやかな番組もコロナ禍の影響を受けた。緊急事態宣言以降、出演者にスタジオに来てもらうことができなくなつた。そこで番組存続のためにはリモート出演を選びざるを得なくなつた。放送用の中継回線を使わずにパソコンのカメラでインターネッットを使って映像を送受信できる仕掛けがあることは以前から知っていたが放送で使うことは映像の質が悪く敬遠されてきた。それがコロナ禍によってテレビ画面に堂々と躍り出た。画質や音質に厳しいNHK技術の従来の基準では、ネットからの映像を10分間流し続ける

選択は通常許されなかつたであつたらう。それが非常事態、一気に動いた。11月の時点でも「視点論点」の7割はリモート出演、出演者それぞれのパソコンからオビニオンを送りそれを収録する。画質も音質も様々、それでも伝えることを優先して目をつぶる。おかげでパンデミックの欧州、人権運動渦中のニューヨークからも出演者を選べるようになった。この20年来、言われてきた放送と通信の連携がこのささやかな番組でも実践できるようになつた。

突然、世界が共有した非接触空間、その渦中で人々をつなぎ止めたリモートによるコミュニケーションを取材現場は柔軟に取り入れている。感染拡大が進む6月に放送されたBSスペシャル「見えざる敵を観る」ミクロの目で見える新型コロナの正体」は実に新鮮だった。最前線で格闘する研究者と医師がリモートで情報を交換し、それを受けて医師免許を持つクリエイターが、ウィルスの姿をCGで

作り上げる過程を自撮りとリモート画面で追つたドキュメンタリーだ。これまで観たことのない新鮮な手法であくなく人間の英知を浮かび上がらせていた。

今、我々は遠隔地にいてもすぐに結びつき、意見を交換し新たなものを生み出す、まさにTELE・VISIONの世界にいる。

コロナは終戦特集も大きな影響を受けた。8月6日、原爆の日、広島放送局は、10ヶ月前にテーマを決め春から本格的な現地取材に入る。広島放送局は今年、米軍がおこなった被曝線量調査の膨大な極秘資料を手に入れ米国取材に入る予定だった。それが感染拡大と共に一切出来なくなつた。途方に暮れたスタッフのもとにあつたのは、その下調べ取材の過程で偶然手に入れたマンハッタン計画の現場責任者・トマス・ファレル准将の手記だけだった。パンデミックが世界に拡大する5月、スタッフはこの手記二点に頼るしかなかった。手記を当時の映像資料で肉付けする一方で、これに対する日本側の映像資料を掘り起こす「証言と映像でつづる原爆投下・全記録」へと切り替えた。これまで8・6スペは毎年、新しい切り口を求めて一点テーマの新撮を基本的に制作されてきた。それができない中、スタッフは方針を変え、作業をもつぱら残された資料を凝視することに当てた。これが功を奏した。過去それぞれ他の番組で使われた映像や証言が再登場するがそれらをこの番組の構成のもとに連結すると新たな価値をもたらした。ロケ禁止のやむをえない状況下で、若いスタッフが腰を据えて、かつての膨大な映像に向き合い新たな価値を探った意味は大きい。

BSスペシャル「世界同時ドキュメント『私たちの闘い』」自撮り映像でつづる半年間」には何人の市民の目(スマホなどのカメラ)が登場したのか、欧米、南米、アフリカと

広がる感染、渦中の市民の混乱をほぼ同時にまると記録した。これも制作スタッフは現地に行かず、世界各地から映像を集める仕事に徹した。

例えば「NHKスペシャル・映像の世紀」は、各地に散る膨大な映像資料を束ね、同じ時期の活字記録と重ね、過去の出来事をさながら中継映像のように見せるという果敢な挑戦だった。このコロナ禍で生まれた「現地ロケのないドキュメンタリー」を見て、世界中に残る膨大な映像記録、そして今なお各地の市民から生まれる無限の映像をいかに束ね、価値を生み出すか、という新しい領域に我々は入ったという確信を得た。しっかりと検証されることなく、「市民はすぐに忘れる」という傲慢な政治手法が横行しているが、映像音声記録は必ずどこかで刻々と残され散在している。核心の現場に必ずカメラがある。この宝の山を統合し事の真相に迫り後世に伝える「映像の世紀」ならではの仕事の可能性をコロナは強く感じさせてくれた。

10月12日の「視点論点」での建築家・隈研吾氏の話だ。「疫病は古代ローマから、都市の歴史、建築の歴史に大きな影響を与えてきた。このコロナという未曾有のデザイナーは『箱』の中に人間を詰め込むことが効率的だ、人間の幸せにつながるんだ、という建築の考え方に大転換をもたらす。」

我々の仕事もパンデミックを経て、明らかに次のステージに入っていると思う。

蟄居の日々とオンライン

鈴木嘉一

新型コロナウイルスの感染拡大を防ぐため、政府が「緊急事態宣言」を発令した4月から5月にかけては、私の周辺でも会食やイベント、

パーティーなどが次々に中止や延期となり、予定していた旅行や酒席も取りやめた。週1回通っているテニススクールも、映画館も休業となり、取材やインタビューで人に直接会うこともままならない。「不要不急の外出」は自粛を迫られ、ひたすら家に籠もる毎日を余儀なくされた。いささか気取った「ステイホーム」という言い方よりは、「蟄居」という時代劇を思わせるような言葉の方が鬱屈した気分合った。

私は首都圏のベッドタウン・千葉県柏市に住んでいる。原稿の執筆や読書、録画したままになっていたテレビ番組の視聴などに飽いた4月半ば、思い立って、車で市郊外のあけぼの山農業公園に行った。インターネットで検索し、地元では春の風物詩として知られるチューリップ畑が満開と知ったからである。風車前に広がる畑には赤、ピンク、オレンジ、紫、黄色、白のチューリップが整然と咲き誇り、目と心が洗われる思いがした。毎年、近隣の小学校の児童たちが植えている球根もある。好天に誘われてか、家族連れやお年寄りのグループが、花見を楽しんでた。

その数日後、新聞の千葉版を開いて、驚いた。「コロナ禍で自粛期間中にもかかわらず、チューリップ畑に見物客が来ていいのか」というクレーンが市役所に寄せられたため、市はすべてのチューリップを刈り取ったという記事である。日常生活や行動が制限されている鬱憤を他者への非難や攻撃に転嫁する不寛容な人だけではなく、そうしたごく一部の声に抗えず、満開の美しい花を切ってしまう市の姿勢にも暗然とさせられた。

そういえば、老いた母の郷里である千葉・南房総地方では、家族の1人が関西方面に旅行し、その地方で初めてのコロナ感染者となった家に、何者かが「こんな時期に遊びに行くな

んて、何を考えているのか」などと中傷する紙を貼ったという話を聞いた。

こうしたさすがすぎた空気が全国に波及し、「自粛警察」という新語が生まれたほどである。実に嫌な風潮と言っほかない。

その一方、コロナ禍の日々の中、必要に迫られて参加するようになったのが、Zoom（ズーム）やSkype（スカイプ）、Teams（チームズ）などのビデオ通話システムによるオンライン会議だった。定例の会議はすべてオンラインに切り替わり、放送関係の賞の選考会もリモートで実施された。ホストからミーティングへの招待メールを送ってもらえれば、参加するのはそう難しくない。

少人数による意見交換にも便利で、オンラインでのインタビューも受けた。学生時代の仲間から計3人でのオンライン飲み会に誘われ、1人が退場した後も、もう1人との「二次会」が延々と続き、盛り上がった。

取材や会合などはやはり、対面が大原則に違いない。飲み会にしても、リアルの方が楽しいに決まっている。

しかし、コロナ禍がいずれ収束した後でも、オンラインをうまく使えば、「新しいコミュニケーションのツール」として有効性を発揮するのではないか。コロナ禍で企業社会に広がったリモートワークも、働き方改革の推進力の一つになるだろう。

災いを転じて福となす、としたい。

北朝鮮向け放送「再考」

田中則広

不要不急の外出を控える生活にも慣れ、近頃は部屋に籠って北朝鮮向け放送に関する文章を執筆する毎日が続いています。

北朝鮮をめぐる諸問題がクローズアップさ

れる以前から、日本のみならず、韓国や米国などの放送局は、「正確な情報」を北朝鮮国内の住民にも届けようと、短波による北朝鮮向け朝鮮語放送を実施してきました。小生も1970年代から80年代にかけての「BCLPブーム」の際には、睡眠時間を削ってまで短波ラジオの受信機にかじりつき、世界各地からの放送に耳を傾けたものです。あれから40年が経ち、民営、公営、国営など、多様な組織形態を持つこれらの北朝鮮向け放送について、それぞれの特色や、どのような目的をもって発信し続けているのかといった点を、番組の分析や制作担当者への聞き取り調査を通じてあらためて考えてみました。北朝鮮による拉致被害者の問題が一向に進展しない日本としては、将来的に放送を利用することでいかなるアプローチが可能なのか、また、そこにはいかなる課題があるのか、などといったことを考えるきっかけになればと思つたからです。

海外からの放送をモニタリングする味な作業の連続ですが、それなりに楽しくやっています。ただ、現地向向き、関係者たちから直接話を伺うスタイルに慣れているためか、国内にとどまって情報をかき集めるのは殊の外苦勞が多く、執筆中に立往生することもしばしばです。現場のスタッフも必要最小限の人数で業務に従事しているようで、質問を送っても、スムーズな返答は期待できません。

いずれ安全の見通しがついたら満を持して取材に出かけるつもりですが、これまでのところ、ソウルはともかく、ワシントンDCやロンドンなどは新型コロナウイルスの感染状況が相当深刻なようです。現地を訪れるには今しばらくの時間が必要となるでしょうが、体力を温存しながら準備を進め、しかるべき時が来るのを待ちたいと思います。

放送メモ①・パンデミック関連番組 (テレビ) (～9月末)

1月23日(木) 27日(月)～毎週・月～金、19:30～20:54、BS-TBS

「報道1930」 出演：松原耕二、高畑百合子、出水麻衣、堤伸輔、パトリック・ハーラン、
パンデミックの主なゲスト：寺嶋毅(東京医科大学・教授)、久住英二(ナビスクリニック理事長)、岡田晴恵(白鷗大学・教授)、倉持仁(インターパーク倉持呼吸器内科院長)、松本哲哉(国際医療福祉大学教授/日本環境感染症学会副理事長)ほか、

2月27日(土) 19:00～、50分+50分、NHKBS1

BS1スペシャル「見えざる敵に挑む ～AIが迫る感染爆発～」

出演：ユーヤング(26) AIで未来を見通す男、ウイズコロナを生き抜くヒント・倉橋徹也。

語り：田中敦子、西島秀俊、D：原田泰二、芹田洋、柳原秀平、藤田功一、P：田野稔、制作統括：菊池賢一郎、常真嗣朗、制作：NEP、制作協力：グループ現代、制作著作：NHK、

※お詫び・2月下旬～3月、ドキュメンタリー系番組を見ている余裕がありませんでした※

3月19日(木) 21:00～、50分、NHKBS1 ☆

BS1スペシャル「ウイルスVS人類1 ～未知なる敵と闘うために～」 ⇒⇒続編・4月25日。

～数週間前から、世界はパンデミック。～シンプルなつくりの対談形式の解説番組～

▽ペストやインフルエンザ、SARSなど感染症との闘いの歴史はコロナ対策に生かされている？▽地球温暖化とグローバル化の加速、未知の感染症の脅威にどう備える？▽「見えにくいウイルス」との困難な闘い。

司会：瀬名秀明(作家) 出演：押谷仁(東北大学大学院教授)、五箇公一(国立環境衛生研究所室長・外来生物の研究者)、解説：中村幸司(NHK解説委員)、
D：葭科直靖、取材：川畑耕平、P：平良英、制作統括：堅達京子、古屋吉雄、制作：NEP、制作協力：パオネットワーク、制作著作：NHK、

3月20日(金) 21:00～、120分、BSテレ東、～未見～

BSテレ東 開局20周年特別企画・日経スペシャル「SDGsが変えるミライ～小谷真生子の地球大調査～」第1回

MC：小谷真生子、滝田洋一(日本経済新聞)、角谷暁子(テレビ東京アナ)、ゲスト：田瀬和夫(SDGパートナーズCEO)、柳良平(エーザイCOO)。～日本が進むべき道を考える全5回シリーズ。環境・ジェンダー・健康・働き方などの視点から。～

△持続可能な社会・経済を作るために、ニッポンは何ができるのか。①世界経済フォーラム年次総会「ダボス会議」/世界の潮流・SDGs(持続可能な開発目標)。②オーストラリア森林火災/資源国が半壊したジレンマ。③【米旗】アル・ゴア前副大統領VSサントリー新社長 環境大論戦! ④投資の新常識「ESG投資」/なぜ世界のマネーはESGに流れ込むのか。

4月4日(土) 23:00～、60分、NHKEテレ

ETV特集「緊急対談 パンデミックが変える世界 ～歴史から何を学ぶか?～」

出演：ヤマザキマリ(作家)、磯田道史(日本史)、山本太郎(長崎大学熱帯医学研究所教授)、河岡義裕(東大医学研究所教授・ウイルス感染学)、P：小林亮夫、原一雄、D：山口智也、制作統括：矢吹寿秀、梅原勇樹、東野真、

4月11日(土) 23:00～、60分、NHKEテレ

ETV特集「緊急対談 パンデミックが変える世界 ～海外の知性が語る展望～」

聞き手：道傳愛子、イアン・ブレマー(政治学者)、ユヴァル・ノア・ハラリ(歴史学者)、ジャック・アタリ(経済学者・思想家)

P：山口智也、D：久保真紀、小林亮夫、制作統括：矢吹寿秀、梅原勇樹、東野真、

4月18日(土) 19:00～、50分+50分、NHKBS1 ☆☆

BS1スペシャル シリーズコロナ危機「グローバル経済 複雑性への挑戦」第1弾 ⇒⇒7月5日に、第2弾を放送

～時代の枠組み、価値観を転倒させる変化はあるか?～ △混迷を深めるコロナ・ショック。リーマンショック以上、第二次大戦以来の危機、△「欲望の資本主義」「欲望の時代の哲学」の出演者他、世界、日本の知性が、今これから大転換の時代を読む。

出演：ジョセフ・スティグリッツ(ノーベル賞・ニューヨーク)、トーマス・セドラチェック(チェコ銀行)、マルクス・ガブリエル(哲学者・ボン)、ニール・ファーガソン(歴史学者) ルチル・シャルマ(ストラジスト・デリー)、ペリー・メーリング(金融史・ボストン)、小幡績(元大蔵省)、飯田泰之(経済学者)、早川英男(元日本銀行)、語り：石橋亜沙、コーディネーター：久山華子、リサーチャー：今野英一郎、取材：大西隼、真治治、D：小西篤志、P：高橋才也、制作統括：藤田英世、丸山俊一、制作協力：テレビマンユニオン、制作：NEP、制作著作：NHK。

4月19日(日) 49分、NHKBS1 ☆

BS1スペシャル「そして街から人が消えた～封鎖都市・ベネチア～」

△2月8日：感染者3/死者0。カーニバル開始・18日間。番組の殆ど(40分)はカーニバルを描く。その仕組み/運営/意味/その進行/人々の興奮を克明に追う。
△あと2日の2月23日：感染者146/死者3。サンマルコ広場に数万の観客を集め、衣装コンテスト開催中に、「明日からカーニバルは中止!」が発表。隣の州でクラスターが発生し急拡大していた。△3月8日イタリア北部ベネチア封鎖、街から人が消えた。△4月に入り、祭りの関係者のコメントが届く。ラストクレジットは「封鎖は5月まで続く」。

語り：井上二郎、コーディネーター：パトリツィア・パバンドレア、取材：東郷洋子、D：豊田研吾、P：木村和人、制作：小山清史、嘉悦登、制作：NEP、制作協力：NHKコスモメディアヨーロッパ、制作著作：NHK、～よく分かるカーニバル～

4月25日(土) 23:00～、60分、NHKEテレ

ETV特集「緊急対談 パンデミックが変える世界 ～ユヴァル・ノア・ハラリとの60分～」

聞き手：道傳愛子、出演：ユヴァル・ノア・ハラリ(歴史学者)、～4月11日放送のインタビューの原版～

P：山口智也、D：久保真紀、小林亮夫、制作統括：矢吹寿秀、梅原勇樹、東野真、

4月25日(土) 20:00～、50分、NHKBS1

BS1スペシャル「ウイルスVS人類2～カギを握るワクチンと治療薬～」

～科学の進歩に期待したい、必ず雨は上がる、みんなで頑張ろう???～ △第一線の専門家が徹底討論! △ウイルス学の世界的権威が挑む新ワクチン。
△日本の感染症治療の最前線で闘う医師が期待する薬とは? △国の感染症対策のキーマンが語る課題…ワクチン開発には12～18か月が必要。世界中で続く競争。▽人類は連携してこの危機を乗り越えられるか。 司会：瀬名秀明(作家/薬学博士)、出演：河岡義裕(東京大学医学研究所)、大曲貴夫(国立医療研究所・国際感染症センター長)、岡部信彦(川崎市健康安全研究所所長)、以上リモート出演。解説：中村幸司(NHK解説委員)、D：上條達也、取材：葦科直靖、P：川畑耕平、制作統括：笠宮京子、古屋吉雄、制作：NEP、制作協力：パオネットワーク、制作著作：NHK、

5月4日(月) 20:00～、50分、NHKBS1、☆☆☆

BS1スペシャル「封鎖都市・武漢 ～76日間 市民の記録～」

～医療現場の生々しい声を伝えた北京のネットラジオ。76日間の市民生活のリアルな日常に迫る。～ △ソーシャルワーカーの郭晶(29)は封鎖初日から「武漢封城日記」を発信。同じマンションの住人、清掃員の夫婦・庶民の生の声を伝えてきた。△北京のネットラジオ番組「故事FM」は、武漢の医師、患者の悲痛な声を配信。官製メディアが伝えられない医療崩壊など切迫した実態が浮かび上がる。 D：房崗嵩、P：鐘川崇仁、制作：テムジン、

5月9日(土) 20:00～、50分、NHKBS1 ☆☆

BS1スペシャル「ドキュメント コロナ危機 ～世界が苦闘した4か月～」

語り：豊原謙二郎、リサーチャー：白山恵子、欺野、D：平川和宏、佐藤創哉、阿部正良、P：日野稔、制作統括：川口潤、山筋敦史、制作：NHKグローバルメディアサービス、制作協力：グループ現代、制作著作：NHK ～よく分かるコロナ危機～

5月12日(火) 21:00～、50分、NHKBS1

BS1スペシャル「ウイルスVS人類3 スペイン風邪 100年前の教訓」

～死者は世界で最大1億人、日本も45万人。100年前のスペイン風邪(インフルエンザ)から、今日への教訓を探る～

5月8日リモート収録。△情報の共有と透明化…1918年第1次大戦中、各国は兵士の病気を隠蔽。/最初は3月アメリカ中西部の基地で発症。参戦国から4か月で世界中に広がる。/7月中立国のスペインが発表。「スペインインフルエンザ」の名がつく。/18年9月ボストンで1日100人死者。/米軍の戦死者5万人、インフルの死者5万7千人。△制限解除の難しさ…石橋を叩く慎重さ。/18年軍艦矢矧(やほぎ)がシンガポール上陸許可4H、乗員469人の9割が罹患、48人死亡。△米大統領ウイルソンが罹患したため、パリ講和会議で、仏の莫大な賠償金要求を防げず、ナチの台頭を招いた。

司会：塚原愛アナ、出演：磯田道夫(国際日本文化研究センター准教授)、川名明彦(防衛医科大学校教授)、構成：佐久間務、リサーチャー：川崎隆博、取材：高田隆次郎、長谷川真子、D：羽根井信英、宮部洋二郎、制作統括：内田俊一、鈴木真美、奥田朋之、制作：NEP、制作著作：NHK、テレコムスタッフ。

5月23日(土) 21:00～、50分、NHKBS1

BS1スペシャル「コロナ新時代への提言 ～変容する人間・社会・倫理～」

出演：山極寿一(人類学者・京大総長)4/28収録、國分功一郎(哲学者・東大准教授)5/1収録、飯島渉(歴史学者・青山学院大)

ナレ：杉浦友紀、取材：大作麻利、福田菜摘、D：加藤伸一、制作統括：春日孝夫、佐々木健一、蒔田英世、制作：NED、制作著作：NHK、スパークル、

～お客を置いてゆく番組の典型?? ジョルジョ・アガンベン(哲学者)に学べ?? みな、「俺の出番だ!」と言わんばかりに、上から目線でテンション高く・偉そうだ…。～

5月31日(日) 21:00～、60分、NHKG、

NHKスペシャル「世界同時ドキュメント 私たちの闘い」

～自撮りの撮影を託して集めた映像。“自発的な連帯”、危機を経験して、この世界がより良くなる。～

語り：守本奈美、D：座間味圭子、山森英輔、制作統括：春日直人、寺園真一

5月31日(日) 22:00～、50分、NHKBS1

「はなれてひとつに奏でる 奇跡の“パプリカ”誕生秘話」

～自撮り映像を山口尚人(トロンボーン奏者)に送り、62人がテレワークで合奏、その涙と笑いの1週間。～

出演：山口尚人、長谷川彰子、ビルマン聡平、田村安紗美、新日本フィルハーモニー交響楽団、

D・編集：岩田弘史、制作統括：行成卓己、岩田弘史、松永真一、制作協力：NED、制作著作：NHK、レノンズ、

5月31日(日) 24:55～、30分、日本テレビ

NNNドキュメント20「74例目と呼ばれて～新型コロナ“3密”原点からの警鐘～」

△今年2月に北海道北見市で多数が罹患した「展示会クラスター(=感染者集団)」の一人が、自らの体験を語る。

ナレ：湯浅真由美、D：村崎亜邪芽、P：真鍋浩史、制作著作：北海道テレビ放送、

6月1日(月) 24:00～、NHKBS1

世界のドキュメント「新型コロナ抑止の最前線」KBS制作 ～取材者が相手に信頼されている！～

6月3日(水) 20:00～、NHKEテレ、

ハートネットTV「コロナの向こう側で ～湯浅誠～」

△社会活動家・湯浅誠。自身の変遷10数年を語り、今、何を大事に、どうすれば良いかを訴える。△分断を防ぐ方法。目線を合わせて見る、「出来る人が出来ることから」、小さなことに意味がある。△困っている人が相談したくなるような社会的雰囲気を作りたい。

D：森田智子、P：久保暢之、制作統括：岩根好孝、

6月6日(土) 23:00～、60分、NHKEテレ、☆☆☆

ETV特集「リモート調査報告 マスクが消えた日々 ～医療現場をどう守るか～」

△日本では、マスクの国の認可基準がない！ ～よく分かるマスク騒動！ 面白い。～

語り：久嶋志帆、編集：増村晶、D：川恵美、市川佳子、井出有吾、P：山口智也、制作統括：矢吹寿秀、東野真、制作著作：NHK

6月7日(日) 5:00～、60分、NHKEテレ ☆

「心の時代 ～宗教・人生～『緊急事態宣言の日々に』」

出演：辺見庸。ひとり語り。スマホによる吹き込み収録。制作著作：NHK。 ※P&Dほか表記無し。

～コロナによって明らかになった冷酷な世界。大日本帝国がやって来た！～ △異論を排除する。貧困は悪じゃない!! △「行動変容」嫌な言葉だ、「欲しがりません勝つまでは」と。△私権を自ら制限してしまう、ファシズム以上ではないか。

6月8日(月) 22:45～、30分、NHKG

ストーリーズ「新宿ダイアリー 母とコロナの4か月」

新宿で麻雀店を3つ営む柚木佳絵(72)と次郎(75)、コロナの荒波に揉まれる日々を追う。D：柚木史絵、P：渡辺田裕。制作著作：NHK

～娘が母の姿を撮る、プライベートビデオの延長のドキュメントが、在宅で出来た?? でも、これって番組?～

6月11日(木) 22:00～、50分、NHKBS1

BS1スペシャル「山中伸弥が聞く新型コロナ ～3人の科学者+1人の医師との対話～」

5月31日収録。出演：河岡義裕、朝永啓造、宮坂昌之、大西貴夫

6月13日(土) 21:00～、50分、NHKG

NHKスペシャル「混迷のアメリカ ～コロナ時代 世界に何が起きているのか～」

司会：鎌倉千秋、武田真一、語り：〇〇洋司、～総花的～ ※P&Dほか表記無し。

△リベラルデモクラシーに悲観、希望なし。分断お世辞。若い世代の連帯は???

6月13日(土) 22:00～、50分、NHKEテレ

「僕らの定点観測～アフターコロナの乗りこなし方～」

リモート会議風。出演は“1980年生まれ”40才の5人。山口一郎(サカナクション)、妻夫木聡(俳優)、又吉直樹(お笑い芸人・小説家)、森永邦彦(「アンリアレイジ」デザイナー)、吉田ユニ(アートディレクター)。制作:NEP、※P&Dは表記無し。～俺は40歳の時、何をしていたっけ? などと思う。～

6月14日(日) 20:00～、50分、NHKBS1、☆☆

BS1スペシャル「中国コロナ危機 絶望のトラックドライバー」

語り:遠藤憲一、D/編集:高倉天地、D:劉冊冊(王へんに冊)、取材:王岩棣(テイ)、制作統括:内田俊一、鈴木真美、郭強、制作:NEP、制作著作:NHK、テムジン、△3千万人の自営業のトラックドライバーに支えられている巨大な物流市場。△出身地差別・コロナ差別で、サービスエリアに入れず、時に絶望し死を覚悟、生き残りを賭けて闘う姿を追う。～中国は人海戦術なり。～

6月20日(土) 23:00～、60分、NHKEテレ ☆

ETV特集シリーズ「パンデミックが変える世界～台湾・新型コロナ封じ込め成功の17年～」

司会:道傳愛子、出演:陳健仁(前台湾副総統)、オードリー・タン(唐鳳)(IT担当閣僚)、陳時中(中央感染症指揮センター・指揮官)、張上淳(台湾大学副学長)、取材:中村侑太郎、D:立川修史、中島和浩、制作統括:横山敏子、東野真、秋満彦造、梅原勇樹、制作協力:NED、制作著作:NHK、テレコムスタッフ。～2003年のSARSの教訓を活かして対応。まだ、いわゆる戦時国家だ。ITと人。～

6月27日(土) 22:00～、50分、NHKBS1 ☆☆☆

BS1スペシャル「見えざる敵を観る ミクロの目で迫る新型コロナの正体」

CG制作:瀬尾拓史、平田正徳、語り:磯野佑子、取材:奥村太祐、D:菅原章五、制作統括:菅原花子、藤田英世、佐々木健一、制作:NED、制作著作:NHK、キリオスコース。～CGでコロナを可視化する! 絵(映像)でよく分かる! 新型コロナ。～

△東大医学部卒の医師で医療CGクリエイター・瀬尾拓史が感染症やウイルスの専門家に独自取材し、科学的知見をもとに“見えざる敵”の正体を、CG技術で可視化。△世界初の映像で、新型コロナの“謎”に迫る。感染や増殖、劇症化、治療薬のメカニズムが“目で見て分かる”科学ドキュメンタリー。△発症の2日前が感染のピーク。

6月28日(日) 22:00～、50分、NHKBS1 ☆

BS1スペシャル「医療崩壊 ～イタリア・感染爆発の果てに～」

D:豊田研吾、長澤愛、P:木村和人、制作統括:小山靖史、嘉悦登、制作:NEP、制作協力:NHKコスモメディアヨーロッパ、制作著作:NHK。△イタリア北部バルガモ県。最前線の医師、看護師、救急隊員、患者家族など・延べ25人にインタビュー。△医療崩壊の凄惨な現実。“命の選別”。過酷な現場にいた人々の証言記録。～勉強になります。明日は我が身ゆえ!～

7月2日(木) 9日(木) 22:00～、30分×2回、NHKEテレ ☆

「世界10代 コロナ会議」

コロナの時代を生きる世界の10代が、5/20から1か月、「自撮り」のメッセージをやり取りし、本音を語り合う。世界8つの国と地域・16人が参加
第1回:学校や勉強について。『オンライン授業ってどう?』『コロナでふりかかった学費の話』、第2回:コロナで浮かび上がった問題。“誤った情報”“フェイクニュース”との付き合い方。医療従事者やコロナ感染者への差別、社会に広がる差別の問題。そして最後に、コロナが出会わせた『世界各地の10代との出会いに、ありがとう!』と言う。語り:小松由佳、取材:卜部弥生、D:谷紗耶香、山本康平、P:成松弘明、制作統括:石津雅、制作著作:NHK

7月4日(土)19:45～、74分、NHKG ☆☆☆

NHKスペシャル「タモリ×山中伸弥 人体VSウイルス ～脅威の免疫ネットワーク～」

△ウイルスと攻防を繰り返す「免疫」の仕組みに秘められた人類を救うカギとは? △驚くほど精緻な仕組みを進化させた人体の「免疫」と、巧妙に掻い潜るウイルスの特殊能力。その攻防。△ミクロの激闘を最新の顕微鏡映像と高精細なCGで完全映像化、ナゾの解剖に挑む。△司会:タモリ、出演:山中伸弥、赤木野々花、ゲスト:石原さとみ、福岡聖樹(ラグビー⇒医者志望)、語り:桑子真帆、仲野太賀、取材:芥川美緒、秋山路子、CG制作:倉田裕史、VFX:高島和成、斎藤丈士、D:佐藤匠、鈴木洋介、兼子将敏、白川裕之、古川千壽?、P:阿久津哲雄、制作統括:浅井健博、井上智広、制作協力:NED、制作著作:NHK、～よく分かる「新型コロナウイルス」決定版～

7月4日(土)23:00～、60分、NHKEテレ、☆☆

ETV特集「世界コロナ「闘病記」 変わりゆく家族のカタチ」 ～SNSによる個人の発信から、番組へ。～

ナレ:合原明子、取材:土屋淳、平林亮、片山亮、D:中山真太郎、制作統括:春日孝夫、鈴木健一、東野真、制作:NED、制作著作:NHK、スパークル、

7月5日(日)22:00～、50分+50分、NHKBS1 ☆☆

BS1スペシャル シリーズコロナ危機「グローバル経済 回復の攻防戦」第2弾

△停滞する回復。一割経済の到来。△上昇する市場の怪・バーチャルだけが夢を見る。△グローバルな鎖のほころび・大国内の混乱(格差・ポピュリズム)。△歴史に学ぶ。△不確実の渦の中で、グローバリズムの更新。△回復力の攻防戦。

出演: エスター・デュフロ(ノーベル賞受賞)、ジョセフ・スティグリッツ(ノーベル賞受賞)、ニール・ファーガソン(歴史学者)、ウルリケ・ヘルマン(経済ジャーナリスト)、語り: 石橋亜沙、コーディネーター: 太田真理エリザ、リサーチャー: 今野英一郎、取材: 大西隼、真治史、D: 小西篤志、P: 高橋才也、制作統括: 藤田英世、丸山俊一、制作協力: テレビマンユニオン、制作: NEP、制作著作: NHK、～新たな模索は終わらない、貨幣と人がある限り～

7月12日(日)22:00～、50分+50分、NHKBS1、☆☆☆☆

BS1スペシャル「レバノンからのSOS ～コロナ禍いつめられるシリア難民～」

△レバノン(面積は岐阜県と同じ)が3月15日非常事態宣言。シリア難民120万～150万。△児童誘拐～臓器売買(腎臓・角膜など)。ゴミ捨て場にあった・妹の遺体に手術跡。△国連の支援は月2万、2割にししか届いていない。△内戦、レバノン人の難民襲撃。△臓器を買う女性と売りたい少女13歳。△人身売買・家族に200ドルで売られ、コンテナで売春をさせられる。△難民男性がストレスで暴力化。△裁縫で稼いで、少女たちの相談にのる女性が公安に逮捕。滞留許可証を持っていない(1000ドルとレバノン人の保証人が無く買えない)。△支援を待つより、働いて自立したい。マスクを作る、月300ドル。

語り: 大竹しのぶ、コーディネーター: 中川稲子、取材: 藤井沙織、D・撮影・編集: 金本麻理子、制作統括: 東野真、塩田純、制作: NED、制作著作: NHK、椿プロ、～秀作。だが、悲しすぎる……。～

7月12日(日)23:00～、毎日曜日・全4回、NHKEテレ ☆

「ズームバック×オチアイ」～生活が一変したコロナ禍の混迷。未来が見えない今、NHKの資料映像を駆使して、過去の考察を手がかりに、「半歩先の未来」を提示する。番組編集長は落合陽一(筑波大学准教授)。～

第1回『半歩先のニューエコロジー』20分

△コロナ禍で、CO2排出量の減少など環境に好影響もあるが、私たちの暮らしはどう変わっていくのか? △14世紀のペスト大流行の人口減で、農地が荒れるのを防ごうと、家畜を放牧。△その結果、人と家畜・96VS野生動物・4となる。△地産地消とコロナ禍の制約を新しいゲームだと面白がってみよう。

第2回『半歩先のニューエコノミー』20分

△20世紀初頭の世界恐慌とリーマンショックを検証。△世界経済好転の起死回生の新たな経済システム…新しい貨幣が生まれる。

第3回『“自粛”の半歩先から』30分、D: 河瀬

△各国が強制ロックダウンする中、様々な“自粛”で対策を続ける日本。△強制されずに一斉にマスクをつけるメンタリティーは世界からの称賛を受ける。△一方で同調圧力から空気を読み、インフォデミック(「誰かが言ったから」と、ニセ情報を取り込む)。△日本人特有のメンタリティーが切り拓く未来とは。

第4回『教育の半歩先』30分、D: 山内

△休校、分散登校、リモート授業…コロナ禍で問い直された教育。△with コロナの今、子どもにはどのような「学び」が必要なのか。△古代ギリシャから戦後の日本まで、歴史を読み解き、学びの未来を考える。△日本のデジタル対応は20年遅れ。同じシステム・同じ教育・同じ評価は止めるべき。△育てるべきは、直接的社会的に必要とされない人間。豊かさの教育。△『他者の共感性を見捨てずに、他者の共感性を無視する。』

出演: 落合陽一、ナレ: 池田伸子アナ、制作: NEP、制作協力: テレビマンユニオン、制作著作: NHK、

⇒2020年10月3日(土)22:00～、49分、NHKEテレ。

「ズームバック×オチアイ 特別編 落合陽一、オードリー・タンに会う」

台湾のIT担当閣僚、オードリー・タンとの3時間にわたる対談。2人の濃密な未来予測とは…?

7月13日(月)19:00～、50分、NHKBS1

BS1スペシャル「中国武漢・ICU医師の闘い」

△中国武漢、武漢大学中南病院ICU医師・彭支勇(アメリカで医者、5年前帰国)。ICU医師歴26年。2003年研修中の香港で、SARSを体験。息子はレイジアナで医師。△取材開始、1月31日。全国から3200人の医療者が集められ、雷神山病院では3000人が働く。△4月8日武漢封鎖解除。雷神山病院が67日間で閉鎖。死者50人以下。医療従事者の感染無し。語り: 池田伸子、コーディネーター: 佐々木舞、リサーチャー: 王丹妮、D: 邗(又にとへん) 芷葶(ウ冠の下は王)、兼田早智子、黄嘉清、P: (走へんに又) 琦、制作統括: 茂木明彦、今村研一、制作: NEP、制作著作: NHK、

7月18日22:00～、50分、NHKBS1 ☆☆

BS1スペシャル「ウイルスVS人類4 ～新型コロナ免疫の謎に迫る～」

△ワクチンや治療薬の開発のカギを握る『免疫システム』の謎に迫る。△サイトカインストームはなぜ起きる? ▽抗体が長続きしない。▽善玉抗体と悪玉抗体、ほか役に無効抗体(抗体の機能を持たない)も。▽日本やアジアで死亡率が低い謎?/交差免疫を獲得か?/BCGなど各種ワクチンが自然免疫などを刺激? △免疫力アップの秘けつ。十分な睡眠と運動、バランスの取れた食事。冬の室内管理・温度と湿度。

司会：瀬名秀明（作家）、館田一博（感染症学会理事長）、宮坂昌之（大阪大）、岩崎明子（イェール大）。

D：大久保瑞徳、上條達也、取材：山本遥、P：川畑耕平、制作統括：堅達京子、古屋吉雄、制作：NEP、制作協力：パイオネットワーク、制作著作：NHK、～冒頭の「片仮名の用語」解説が早過ぎて、読む時間すら無い！ でも、言いたいことは分かる。～

7月19日（日）21:00～、50分、NHKG、☆☆☆

NHKスペシャル「新型コロナウイルス“生と死”の記録 ～医療最前線・密着の3か月～」

△医師自らが記録のため撮影。「聖マリアンナ医科大学病院（ECM3台、集中治療室15床）」6人の医師と77人の看護師。△6月末：8人死亡、4人治療中に、関連の「西部病院」で、院内感染クラスター80人発生・14人死亡。△救命センター医長・藤谷茂樹医師、患者ケアチーム・中村看護師。△神奈川県立足柄上病院の状況。地域医療の拠点、中等症の患者に対応。

D：津田恵香、松井大倫、山本裕介、制作統括：鈴木伸元、村上洋介、制作著作：NHK ～課題が未解決のまま、第2波が迫っている～

7月19日（日）22:00～、50分、NHKBS1 ☆

BS1スペシャル「ニューヨークの悲劇 ～“感染爆発”と闘った人々～」

～ニューヨークで、なぜ感染爆発は起きたのか。人々はどう立ち向かったのか。～

△女性救急隊員・決死の闘いに密着。△トランプ大統領VSクオモ知事。初期対応での痛恨の誤算。▽病院内部の実態を告発した一人の女性医師・勇気の決断。△「俺たちは消耗品じゃない！」エッセンシャルワーカーたちの悲痛な叫び。△マンハッタンに響く「ラ・マンチャの男」、歌でエールを送りつづけたミュージカル俳優。▽ニューヨークの象徴・地下鉄とバスが感染を広めた？

語り：磯野佑子、コーディネーター：早崎宏治、リサーチャー：中里雅子、D：増田浩、高田里佳子、P：鐘川崇仁、制作統括：川口潤、吉田宏徳、制作協力：テムジン、制作：NHKグローバルメディアサービス、制作著作：NHK、

7月19日（日）23:00～、50分、NHKBS1

BS1スペシャル「ファベラ 見捨てられた街で ～“感染大国”4か月の記録～」

～世界第2の“感染大国”ブラジル。貧民街ファベラの悲劇を、住民自身が記録した映像（2月末～4か月間）が伝える。～

△劣悪な環境下、適切な医療も無く、政府から見捨てられ亡くなる人々。△検査をされぬまま埋葬され、感染に“カウントされない死”となる。△“命の格差”の撮影者は、ツアーガイドの青年コズミ・フェリックセン、住民自治組織の代表。△クリスマスから続く断水など、劣悪な環境下で寄付による配給や炊き出しを試みる。

△4月末、コズミが感染、だが診察は拒否される。△6月2日死者3万人を突破、7月中旬には6万6千に。語り：松田龍平、取材協力：下郷さとみ、D：有元優喜、制作統括：花井利彦。

7月26日（日）6:10～、34分、NHKG

目撃につばん「絶対あきらめない 元ニート派遣会社 コロナとの闘い」

△愛知県東海市、派遣会社経営の立野奨、元ニート引きこもりの派遣社員57人を抱える。△自身も倒産を経験し、見知らぬ他人に救われた経験がある。△社員の和磨(20)。D：谷圭菜、P：松田純、制作統括：板垣淑子、氏原啓行、制作著作：NHK名古屋

7月26日（日）21:00～、60分、NHKG

NHKスペシャル「新型コロナ いま“第2波”への備えは？ 医療現場からの警告」

～医療崩壊が間近に迫る深刻な事態。長期化の予想される闘いをどうするか？～ △医療の課題：検査・保健所のひっ迫、手探りの治療、病床・スタッフのひっ迫、地域医療の危機。△分かり易い指標で危機感をみんなで共有する。課題を社会全体で支える。出演：大曲貴夫（国際医療研究センター・国際感染症センター長）、藤原真澄（科学文化部デスク）、キャスター：武田真一、星野真琴、語り：藤井彩子、小澤康喬、

7月24日（金）22:00～、50分、NHKBS1、☆☆

BS1スペシャル「“コロナ倒産”を防げ～下町信用金庫の二か月～」

～東京・下町の信用金庫の営業マンたちは、客足が激減した中小企業や個人事業主の倒産を防ごうと融資に奔走する。～

△先の見えぬ危機と戦う人々を見つめるドキュメント。△客が激減した中華料理店は家賃や従業員への給与も滞り、コロナ危機支援の融資に望みをつなぐ。

△信金営業マンは「スピードが命」と融資手続きを急ぐが、間に合うのか？ △創業70年のビジネスホテル社長は、外国人観光客が姿を消すなか「絶対にホテルを守る」と前を向く。語り：松本穂香、取材：大月啓介、山本勸介、D：高橋泰一、制作統括：川口潤、岩崎真也、江南亮、制作：NHKグローバルサービス、制作著作：NHK、日本電波ニュース社、

7月26日（日）25:55～、60分、フジテレビ

「世界SF作家会議 サンデーMIDNIGHT アフターコロナの世界とは？」

2020年6月6日収録。司会：いとうせいこう、顧問：大森望、沖方丁、小川哲、藤井大洋、新井素子。△構成：武村武司、D：村尾輝忠、企画：黒木彰一（CX）、プロデュース：下川猛（CX）、制作著作：フジテレビ、△「三体」の作者・劉慈欣のコメント「未来のあらゆる可能性に注意を払い、起こるかも知れない突発的な出来事に対して、少なくとも精神的・理論的な準備を整えて置くべきです」 ～大風呂敷!の番組です～

7月31日（金）21:00～、120分、BSテレ東、☆☆

日経スペシャル「SDGsが変えるミライ～小谷真生子の地球大調査～」第2弾

～新型コロナの感染拡大は「SDGs」の概念にどのような影響を与えたのか。「働き方」「街のあり方」「医療のあり方」などを通じ、「新しい生活様式」に基づく、持続可能な社会形成を考える。加えて、アメリカの人種差別についても考察する。～

△1) コロナ時代の働き方～新SDGsの考え方。△2) コロナ時代の街の変化。△3) コロナ時代の医療の在り方。△4) 人種差別をめぐる議論とSDGs。

△5) 新ESG ～マネーの世界での新潮流が加速～。～結語：渋沢栄一の論議とそろばんを見直せよ!～

MC：小谷真生子、出演：滝田洋一（日本経済新聞）、角谷暁子（テレビ東京アナ）、ゲスト：田瀬和夫（SDGパートナーズCEO）、岡野光夫（東京女子医科大学・先端生命医学センター長）、渋澤健（モモンズ投信・会長兼ESG最高責任者）、奥平和行（日本経済新聞編集委員、在シリコンバレー）、アラン・ジョーブ（ユニリーバCEO）。取材：中村航（テレ東ロンドン支局）、奥山希、D：山口智、中田真、西川裕花、花木?、青木優花、総合D：片山亮、P：野田匠（BSテレ東）、渡辺健一、尾賀達朗、石川剛、CP：影山秀伸（BSテレ東）、制作協力：日経映像、閃SPAKLE、TWS、制作著作：BSテレ東。

8月2日（日）22:00～、50分、NHKBS1 ☆☆☆

BS1スペシャル・シリーズ人体「脅威の免疫ネットワーク～新型コロナとの戦い～」

～目で見て、よく分かる新型コロナウイルス、その正体。さすがです、“人体チーム”～

△新型コロナの驚異的な能力を最新科学で完全映像化。△インターフェロン（異物侵入の「警報物質」）→食細胞→自然免疫。△免疫ウイルス40億年の進化。＝警報物質を抑える能力（ORF3b）を獲得。△第2の防衛隊・獲得免疫＝T細胞、B細胞（抗体）＝を記憶する。△進化の頂上決戦。サイトカインストーム（暴走・免疫細胞の自爆攻撃＝食細胞のDNAを粉砕→（血液細胞を固めて）血栓（肺血栓）になる。△免疫を抑える薬＝感染者の抗体を患者に注入。△大量に抗体を作り出せる人がいる！＝長寿者（100歳も!）が回復する謎は??? 語り：桑子真帆、CG制作：倉田裕史、VFX：高島和哉、斎藤丈士、D：佐藤正、鈴木洋介、兼子将敏、白川裕之、古川千壽、P：阿久津哲雄、制作統括：浅井健博、井上智広、制作協力：NED、制作著作：NHK、

8月3日（月）20:00～、30分、NHKEテレ、☆☆☆

ハートネットTV「精神科病院×新型コロナ ～最前線からの報告～」

△2か月密着。都立松沢病院。△斎藤正彦院長が怒る! 環境が変わるのは患者の負担が大きい。△5月下旬、武蔵野中央病院精神科から61人が入院希望。

患者の移送費を巡り行政と調整がつかず、移送不可。語り：河野多紀、D：持丸彰子、坂川裕野、P：青山浩平、制作統括：真野修。

～東京都も政府も他人事! 弱者のセーフティーネットがどんどん細っている。秀作です。継続取材は?～

8月7日（金）22:00～、45分、NHKEテレ、

ドキュランドへようこそ「コロナ崩壊の現場で ～医師フランチェスカの闘い～」

原題「Inside Italy's COVID War」Mongoose Pictures(イギリス2020)。

△イタリア北部クレモナ病院のER医師、フランチェスカ・マンジャトルディ。△満室で空きベッド無く、優先順位を差別。△感染者の14%が医療従事者。△家族は夫、息子(13)、娘3人(11・7・3)。父(86)は認知症、母(80)が介護。

D・P・編集：サーシャ・ジョエル・ブキッリ、日本語編集：白石江里、制作統括：中元秀俊、北本功。

8月8日22:00～、50分、NHKBS1

BS1スペシャル「市民のアイデアでコロナと闘う～ヨーロッパが挑むスピード変革～」

～EUvsウイルス・EUハッカソン。30日間・・・2160件。EU市民の力⇔ことばの壁が余りない～

△コロナ危機で厳しい都市封鎖が続いたヨーロッパ。EUや各国政府は、市民からコロナに立ち向かうアイデアを募集（ITのスキルが無くても参加可）。△優秀チームには賞（総額100万ユーロ）を与え、資金や人材ネットワークを提供、実用化に向けて急ピッチで動く。△「化学物質も水も使わない消毒機器」「医療用品不足を解消するアプリ」「下水道から感染拡大を予測するシステム」など。△様々なアイデアが実用化へ向かう。ヨーロッパが挑んだスピード変革に迫る。

語り：鹿島綾乃、D：菅家久、制作統括：小山靖史、嘉悦登、制作：NEP、制作協力：NHKコスモメディアヨーロッパ、制作著作：NHK、

8月9日（日）19:00～、50分、NHKBS1

BS1スペシャル「市民が見た世界のコロナショック 7月編」

8月9日(日) 20:00～、50分、NHKBS1

BS1 スペシャル「仕事が消えた～コロナショック最前線」

△NPO法人もやい事務所・大西連、生活保護へ導く。△TOKYOチャレンジネット、住まいを失う人に1日500円×3か月で自立し、15万円貯めてアパートに△NPO法人TENOHASHI、一時金(初期費用と賃料に制限)を付与・財源は寄付金。△大手スーパーの年収400万の正社員が契約拒否で、路上生活に。△大手ホテルの配膳人、時給制で日々雇用・休業補償なし。組合結成へ。
語り: 泉谷しげる、D: 内島悠介、制作統括: 内田俊一/山根幸太郎/鈴木真美、制作: NEP、制作著作: NHK、パオネットワーク。

8月9日(日) 23:00～、50分、NHKBS1 ☆☆

BS1 スペシャル シリーズコロナ危機「生活崩壊を防げるか ～脅かされる“仕事”と“住まい”」第3弾

△非正規雇用者と正規雇用者の雇い止め、ネットカフェを迫られる人々。△支援団体の危機感! 一国の対策は不十分。担当者の人員不足で、福祉崩壊。△生活崩壊の第2波、第3派がアル。 キャスター: 井上二郎アナ、出演: 新型コロナ災害緊急アクション・オンライン会議(瀬戸大作・事務局長)、ゲスト: 稲葉剛(つくりい東京ファンド代表)、荻上チキ(評論家)。
語り: 磯野佑子、D: 中川あゆみ、牧野庄司、制作統括: 平野まゆみ、太田宏一、川口潤、制作: NEP、制作著作: NHK、テムジン、

8月10日(月)～13日(木) 23:00～、49分×4回、NHKBS1 ☆☆☆

BS1 スペシャル「コロナ危機 未来の選択」～世界の知性が語る「コロナ後の未来」を4回で放送。～

① 「ジャレド・ダイヤモンド ～世界が連帯する“最後のチャンス”にせよ～」

△地理学者が人類史の視点で文明の興亡を読み解く。△天然痘・はしかで南北アメリカの先住民が滅ぼされる。△全世界が同時に危機は初めて、世界が協調して課題に取り組むべきだ。△コロナでは全員死なないが、気候変動は全員が死ぬ。△世界が持続可能な軌道に乗る猶予は30年しかない! キャスター: 鎌倉千秋、ゲスト: ジャレド・ダイヤモンド(地理学者)、D: 寺田穂波、P: 大野兼司、制作統括: 小塚正記、棚谷克己、制作: NEP、制作著作: NHK、

② 「ナオミ・クライン ～新たな“ショックドクトリン”を警戒せよ～」

～未来はリアルな人々の創造性にある～ △ナオミ・クライン(ジャーナリスト)は、災害や戦争などの危機に乗じる企業の動きを「ショックドクトリン」、惨事便乗型資本主義と呼ぶ。△パンデミックを機に、教育や医療などで遠隔サービスの拡大に力を入れたIT企業の動きを「スクリーンニューディール」の到来だと懸念。△投資すべきは温暖化防止をめざす「グリーンニューディール」を提言し、今こそ「スローダウン」が必要だと説く。
キャスター: 鎌倉千秋、ゲスト: ナオミ・クライン(ジャーナリスト)、D: 久保伸一、P: 岩谷一、制作統括: 棚谷克己、日置一太、小塚正記、制作: NEP、制作協力: オルタスジャパン、制作著作: NHK。

③ 「マリアナ・マツカート ～国家は“最初の投資家”であれ～」

～<価格>より<価値>を。新しい資本主義への模索を～ GPSやタッチパネルなど企業によって行われてきた技術の多くが、公的支援や公的研究機関から・生み出されたことを明らかにした。「官は民よりイノベーション力で劣る」という「神話」を実証的に打ち砕き、EUの政策立案に深く関わる・気鋭の経済学者マリアナ・マツカート。△コロナ危機の今こそ国家が理念を掲げ、企業を救済するためではなく、創薬や再生エネルギー開発を促すために・公的資金を注ぐべきだと提唱する。 キャスター: 鎌倉千秋、ゲスト: マリアナ・マツカート(経済学者)、リサーチャー: 宮智麻里、取材: 窪田栄一、河野泉洋、寺田穂波、P: 大野兼司、制作統括: 小塚正記、棚谷克己、制作: NEP、制作著作: NHK

④ 「エマニュエル・トッド ～グローバリゼーションを超えて～」

～コロナ危機が人を賢くはしない。 分断と対立を超えるために必要なものは、国を超えた普遍性を常に問い続けること。～
△ソビエトの崩壊やトランプ大統領の誕生を予言して、世界的な知性とと言われるエマニュエル・トッドが世界はどう変わるのか、米中関係やEUの未来を大胆に予測する。△GDPは社会の豊かさを計れない。△悪化の一途をたどる米中関係や、コロナで移動の自由が逆風が吹くEUに、脱グローバリゼーションの可能性。△理想的なリーダー像は、大衆・エリートどちらかに偏らない。
キャスター: 鎌倉千秋、ゲスト: エマニュエル・トッド(フランスの歴史家)、語り: 佐藤克樹、コーディネーター: 篠崎由佳里、取材: 大川広明、木村美咲、D: 大西雄一、P: 岩谷一、制作統括: 日置一太、吉田宏徳、制作協力: オルタスジャパン、制作: NHKグローバルサービス、制作著作: NHK

8月18日(火) 20:00～、30分、NHKEテレ、☆☆☆

ハートネットTV「困った! どうする? ろう・難読者のウイズコロナ」

△耳の聞こえない人たちのオンライン座談会。 司会/D: 長嶋愛+出演者6名。△マスクで口の動きが見えない!
～かれら悩みが具体的にわかります。見てみるモンダ! です。～

8月18日(火) 23:00～、50分、NHKBS1

「Where We call Home 私たちが家と呼ぶところ 『コロナに負けるな! 外国人奮闘記』」

△NHKワールドの番組。290万人の外国人。△トニー・ジャスティス(ガーナ共和国)「トニーの子ども食堂」月2回。コロナでレストランは閉鎖したが、キッチンカーで弁当を移動販売し、「子ども食堂」も続ける。△紗幸(フィオナ・グラハム)芸者置屋を経営～オンラインお座敷。△エディ(イラン)タレント事務所経営

△ポール・クリステイー（大分県国東半島）里山ツアー会社経営、日本人妻・息子4人。取材：柳田香帆、D：中井聖満、宇留田摩周、P：森元直枝、鈴木和弥、制作統括：佐藤正善、前原信也、制作：NHKグローバルメディアサービス、制作著作：NHK。

8月19日（水）26日（水）20:00～、59分×2回、NHKBS3 ☆☆

「英雄たちの選択・～日本人は世界規模の感染症とどう闘ってきたのか?～」

① 「衛生国家への挑戦～3人の先覚者たち～」

司会：磯田道史、杉浦友紀、ゲスト：高橋原一郎、ヤマザキマリ、語り：松重豊

～第1回は、日本人の衛生意識の向上に尽力した3人の先覚者に着目。彼らは現代の危機に何を語りかけるのか?～

△幕末、天然痘の治療に革命を起こした・緒方洪庵、△洪庵に学び、明治時代、コレラ撲滅の陣頭指揮をとった・長与専斎（内務省初代衛生局長）。△日清戦争後、大陸帰還兵の大規模な検疫を成功させ、世界に日本の衛生力の高さを示した・後藤新平。

D：真鍋洋平、P：角田誠二、制作統括：谷口雅一、本道社司、制作：NEP、制作協力：テレコムスタッフ、制作著作：NHK

② 「100年前のパンデミック～“スペイン風邪”の教訓～」

司会：磯田道史、杉浦友紀、ゲスト：瀬名秀明（作家）、児玉龍彦（医学者）、語り：松重豊

～大正時代の日本。50万人近くの命を奪った感染症、スペイン風邪。予防法も治療薬もない未知の病と、当時の日本人はどう闘ったのか?～

△政治や世論に押しされ、医学界を二分したワクチン開発競争。△栃木県の町医者が残した壮絶な治療の記録。△12歳で感染した少女の日記からは、地域と家族の平和が壊されていく恐怖が克明に記されていた。△国、医師、そして患者。100年前の経験から今、何がくみとれるのか?

D：尾沼宏星、佐藤歩、P：角田誠二、制作統括：谷口雅一、本道社司、制作：NEP、制作協力：テレコムスタッフ、制作著作：NHK

8月22日（土）23:00～、60分、NHKEテレ ☆☆

ETV特集シリーズ「パンデミックが変える世界～ブラック・ライブズマターの衝撃～」

～BLMの入門編。2013年、ナイジェリア移民のオパール・トメティと、マルシア・ガルザ、パトリス・カラーズの3人が、SNSを通してBLMを創設。BLMはプラットフォーム「#（ハッシュタグ）」であり、各地で様々な組織が活動する。～7月23日収録。

△アメリカのレイシズムは続く…。△アメリカが互いを尊重する国であって欲しい。

キャスター：道傳愛子、出演：オパール・トメティ（BLM創設者の1人）、ジャック・アタリ（仏・経済学者、思想家）、フランシス・フクヤマ（米・保守派の政治学者）、リサーチャー：高澤圭子、松山果包、D：小林亮夫、久保地真紀、プロデューサー：山口智也、制作統括：矢吹寿秀、梅原勇樹、東野真、

8月26日（水）22:40～、10分、NHKBS1

地球リアル「この度 閉店することに」

～退去ナビ（退去者と入居者を結ぶサービス）を取材。赤坂4月7日開店の経営者を追う。～制作：NED、制作著作：NHK、テレビマンユニオン、

8月29日（土）・30日（日）21:00～、54分×2回、NHKG

NHKスペシャル「パンデミック 激動の世界①② ウイルス襲来 瀬戸際の132日」

1/15～5/25まで132日間を時系列で並べたもの。～課題は、科学の知恵と政治の発信力。～指摘に新味も深みもない!～

キャスター：大越健介、中山里奈アナ、P&Dほか表記が無い。

8月30日（日）23:00～、50分、NHKBS1

BS1スペシャル「江戸の知恵に学べ ～コロナ時代を生きる術（すべ）～」

～助け合いの心で困窮者を救え（その1）、闘うべき相手を定め、心をつにつにする（その2）、文化・芸術で心を晴らせ（その3）、～

出演：ロバートキャンベル（国文学研究資料館・館長）、鈴木則子（奈良女子大教授・医療史&庶民史）、斎藤環（精神科医&批評家）、語り：池田伸子、

D：山本真裕、押田幸、制作統括：川口潤、煙草谷有希子、金濱理明、制作：NEP、制作著作：NHK、ドキュメンタリージャパン、

9月1日（火）21:00～、60分、NHKBS3

アナザーストーリーズ 運命の分岐点「“復活の日”の衝撃～コロナ“預言の書”～」

小松左京の小説「復活の日」。人が死ぬ未知のウイルスが世界中に蔓延し、人類が滅亡の危機に!

ナビゲーター：松嶋菜々子、語り：濱田岳。出演：筒井康隆（作家）、豊田有恒（作家）。

9月3日（木）22:00～、30分、NHKG

クローズアップ現代+「PCR検査は? 医療は? “第2波”で見た課題」

9月9日(水) 22:00～、30分、NHKG

クローズアップ現代+「ローン破綻家賃が払えない 身近に迫る“住宅喪失クライシス”」

9月12日(土) 21:00～、50分+50分、NHKBS1、☆☆☆☆

BS1スペシャル「在宅クライシス ～医療・介護 最前線の闘い～」

9月12日(土) 21:00～、50分+50分、NHKBS1、☆☆☆☆

BS1スペシャル「在宅クライシス ～医療・介護 最前線の闘い～」

前編：訪問介護・デイサービスの休業⇒家族の負担、在宅ケアの危機⇒在宅医療介護支援プロジェクト。

△岩本大希(訪問看護師)・・・末期がん(70代)の濃厚接触者が入院。時間の短縮30分対応。念願の散歩には行けない。だが、家だから電話がいつでも出て、みなが別れが言えて、最期までhappy。岩本は事業所でメンタル指導を受ける。

△雨澤真吾(介護福祉士)・・・勉強会(医師のレクチャー、飛沫の可視化)。サービスを止めない闘い。事業所の連帯(感染した場合・カバーし合う)と連携(現場を行政がサポート)の必要性を訴える。

後編：コロナの看取りをどうすべきか？

△長嶺由以子(在宅医・神奈川県秦野市)・・・がん患者・百合子(80)余命2か月、発熱が続く。「PCR検査は嫌だ」を説得して検査し陰性。最後の診察から3日後に死去。日本人のメンタリティーに差別偏見がある。コロナの看取りのシミュレーションがまだ無い。司会：小野文恵、語り：柴田祐規子、出演：高山義浩(感染症専門医・沖縄県立中部病院)、堀田聡子(在宅ケアが専門・慶応大学大学院)、

～訓練された介護職を養成して、チームを作って連携し、地域の中で応援の仕組みを作る。今学び合いが出来ている、これを超えれば在宅ケアの質が上がる。～

撮影・D：下村幸子、スタジオD：岡内秀明、制作統括：藤田英世、太田宏一、制作：NEP、制作著作：NHK、～明日は我が身なのだ・・・！～

9月13日(日) 22:00～、50分+50分、NHKBS1 ☆

BS1スペシャル「世界同時ドキュメント 私たちの闘い～自撮り映像でつづる危機の半年間～」

△危機の中で自分に何が出来るのか、世界の50人にスマホの自撮りを依頼した。～ひとりひとりの人生、格差が分ける生と死。～

△イタリア：トリノ入院患者、コードニュー看護師、オペラ歌手。△フランス・カンヌ：ベグ店主、△ニューヨーク：病院医療者、地下鉄運転士、△ブラジル・リオ：スラムのギャング、墓地の労働者、病院、検死官、△インド・中東・アフリカ・・・。

取材：山田攻次郎、桂ゆりこ、D：座間味圭子、制作統括：春日真人、寺園真一、制作著作：NHK、

9月15日(火) 16日(水) 20:00～、30分×2回、NHKEテレ、☆☆

ハートネットTV「コロナ禍のがん医療」

- (1)「模索する医療現場」感染も不安、治療を止めることも不安というジレンマに悩む・がん当事者の声と支える医療者の模索を取材。
- (2)「いま聞きたい患者の不安に専門家が答える」

9月18日(金)24:25～、25分、NHKBS1 ～未見～

四国推し！「シン・地方の時代～パンデミックで変わる四国の未来～」

△「あなたは四国に住みたいですか？」新型コロナの影響で地方への移住希望者が増えている。△新しい地方の時代とは何か？ 四国の未来とは？ 生き残る条件とは？ 四国ゆかりの各界のトップランナーが語り尽くす。出演：青野慶久、安藤桃子、伊東豊雄、山崎亮、語り：七尾旅人。

△東京で全社員のテレワークを続ける経営者・青野慶久さん(愛媛出身)。△愛媛・大三島で移住の新たな可能性を探る世界的建築家・伊東豊雄さん。△東京から高知に移住した気鋭の映画監督・安藤桃子さん。△そして「適味」と「寛容性」を手がかりに地域のこれからの提言する山崎亮さん。

9月19日(土) 23:00～、60分、NHKEテレ ☆

E TV特集シリーズ「パンデミックが変える世界～紛争地帯からのSOS～」

△紛争地帯は性暴力+ウイルス。武装勢力が性暴力(レイプ)支配に利用(恐怖で押さえ込む)。△レアメタルの採掘で利益。⇔医療・生活・法的支援。

△難民：南スーダン(内戦で50万人の子供が飢餓状態)、ソマリア(内戦と豪雨)、△ワクチンナショナリズムを克服するには・・・。ACTアクセラレーター、公正な普及・COVAX(172か国参加、米ソ中は不参加)。～よく分かるアフリカ!!～

キャスター：道傳愛子、出演：デニム・ムクエゲ(2018年ノーベル平和賞、コンゴ民主共和国)、馬淵俊介(ビルゲイツ財団理事)。リサーチャー：高澤圭子、コーディネーター：小杉美樹、渡辺修司、D：原一雄、平野裕一郎、P：山口智也、制作統括：矢吹寿秀、梅原勇樹、東野真、制作著作：NHK、

9月20日(日) 3:30～、30分、テレビ朝日、

テレメンタリー2020「コロナ禍 闇に溶ける半グレ」

△「叩き（強盗）案件、報酬100万円」。強盗の実行役に一般人を募る。 △ネット上の闇バイト募集から浮かび上がる「半グレ」。△出回る『カモリスト』。アジアはコロナで閉店のスナック。△暴力団から脱落した新卒の集団、そのトップを暴対法で食べなくなったヤクザが組を脱けた男が仕切る。

△本人は堅気になったつもり。警察との果てなき攻防は続く…。

語り：眞島秀和、取材：平岩和之、宮本華、神志那涼、瀧雄春紀、D：平岩和之、P：藤田貴久、制作著作：朝日放送テレビ

9月21日（月）22:00～、50分、NHKBS1

BS1スペシャル「可視化でここまで見えてきた！ 新型コロナウイルスのメカニズム」

△NHKでは、2020年3月から“見えないウイルス”の感染リスクの「可視化」に取り組む。△専門家との共同実験、特殊撮影、コンピューターシミュレーション。△無症状の感染者のマイクロ飛沫が2メートル先の話し相手に、呼吸にもウイルス。△密閉空間で20分も漂う・マイクロ飛沫。クルーズ船の集団感染。△手を介して広がる接触感染のリスク。△手洗い・マスク・換気・消毒。～感染のゼロリスクは無い！～

語り：利根川真也、橋詰彩季、取材：三木健太郎、小山祐介、D：新見唯、P：木村春奈、制作統括：須藤祐理、浅井健博、制作著作：NHK

9月25日（金）21:00～、96分・生放送・BSテレ東

日経スペシャル「SDGsが変えるミライ～小谷真生子の地球大調査～」第3弾

△私たちの地球の環境は、悪化の一途をたどっている。海洋汚染、感染症・医療問題、貧困…。△今何ができるのか？ 一人一人が果たすべき役割を真剣に考える。MC：小谷真生子、角谷暁子（テレビ東京アナ）、ゲスト：田瀬和夫（SDGパートナーズ CEO）、松本裕子（日本経済新聞 ESG エディター）

9月27日（日）21:00～、60分、NHKG ☆☆

NHKスペシャル「パンデミック 激動の世界③ 停滞か変革か 岐路に立つグローバル資本主義」

～資本主義社会は一つの区切り。豊かさの“モノサシ”を変え、持続可能な社会へ。～

△先進国の（4-6/3か月）GDP、ユーロ圏-39.4%、米国-31.7%、日本-28.1%。△小売業/レジャー/アパレルなど大企業の破綻。

△JALの苦悩/AGCの挑戦（デジタルとAI）。△トーマス・セドラチェック（チェコ、経済学者）。「進化し続けるテクノロジーが人々の生活を豊かにしていく」「デジタルトランスフォーメーション」△ダニエル・コーエン（経済学者）「デジタルは弱肉強食を加速する」△GAF A/富の集中と格差。△新たな経済のあり方。ステークホルダー（従業員/取引先/地域社会）重視の企業。△7月EUの92兆円のコロナ復興基金。3割を環境分野に投資/グリーンリカバリー（気候変動対策）。キャスター：大越健介、語り：中山里奈、P&Dほか表記が無い。

～3回目にして、やっと、番組らしくなった。～

9月27日（日）22:00～、50分、NHKBS1、☆☆☆

BS1スペシャル「プライバシーが感染拡大阻止か ～韓国・最前線の闘い～」

～古典的なプライバシーをまもりながら、個人情報はどう活用するか？ 韓国の実験が、よく分かる！～

△ハン・ドンス教授（韓国科学技術院）～SKテレコムが共同開発を申し出る～。△山本義浩（慶応大学教授）～社会的に議論し共有すること！

語り：鹿島綾乃、撮影：李彰俊、李敏是（?あり）、取材：竹村望、益田公志郎、D：山本雄平、河相國、制作統括：内田俊一、日置一太、岩谷一、

制作：NHKグローバルメディアサービス、制作著作権：NHK、オルタスジャパン。

～※参考・パンデミックによる・新たな企画のドラマ※～

5月4日（日）23:40～、7日（火）23:15～、8日（水）23:40～、30分×3回、NHKG ☆

テレワークドラマ「今だから、新作ドラマ作ってみました」

P：神林伸太郎、大谷直哉、制作統括：西村崇、柴田直之、制作：NEP、制作著作：NHK

第1夜「心はホノルル、彼にはピーナッツバター」 脚本：矢島弘一、D：渡辺一貴、出演：満島真之介、前田亜季、

遠距離恋愛の二人、春のハワイの結婚式が中止から、いつものラブラブトークに隙間風から、価値観の違いに気づき、まさかの破局へ！?

第2夜「さよなら My way!!!」 脚本：池谷雅夫、D：渡辺一貴、出演：小日向文世、竹下景子、

40年連れ添った妻を失ったばかりの夫、パソコンに妻からビデオ電話、「離婚届けを出して！」と。…?死んでいるのは俺?…。

第3夜「転・コウ・生」 脚本：森下佳子、D：岡本幸江、出演：柴崎コウ、ムロツヨシ、高橋一生、

「会いたい」と思った人と魂が入れ替わる・抱腹絶倒のファンタジー・コメディ。柴崎がむろに、今度はむろが高橋に、柴崎は白猫に、入れ替わる。

5月30日（土）23:30～、15分×2回、6月6日23:30～、15分×2回、NHKG

「リモートドラマ Living」 どんぐり（声）：壇蜜、作家：阿部サダオ、

脚本：坂元裕二、制作統括：訓覇圭。締切に苦悩する小説家に、どんぐりが「締切!急げ!」と叱咤激励。奇想天外な秘密を抱えた家族の物語を紡ぎ出す。

第1話『#1ネアンデルタール人』 出演：広瀬アリス、広瀬すず、

D：加藤拓、P：矢部誠人。 平凡な生活を一緒に送っている・仲よし姉妹には、誰にも見せない「裏の顔」を持っていた。人類は滅びる!!

第2話『#2国境』 出演：永山瑛太、永山絢斗、

D：西村武五郎、P：大越丈士。 近未来の日本で「過去にはやった料理」を作り生計を立てる兄弟へ、1通の手紙が届く。人類はこの世の嫌われ者。

第3話『#3おでんとビール』 出演：中尾明慶、仲里衣紗、

D：加藤拓、P：矢部誠人。 妻を愛するがゆえ、妻から怒られ捨てられることを危惧する気弱な夫が、ある日特異な能力を手に入れる。

第4話『#4敬遠』 出演：青木崇高、優香（声）、実況：栗田晴行、D：西村武五郎、P：訓覇圭、

D：西村武五郎、P：大越丈士。 出産間もない妻に風邪をうつさぬよう、自室に籠りテレビを眺めて過ごす夫に、自粛の野球中継が映る！

6月2日（火）23：45～、15分（正味13分）×全4回、WOWOW

リモート制作ドラマ「2020年 五月の恋」

脚本：岡田恵和、D：松永大司、P：岡野真紀子、出演：吉田羊（企画も）、大泉洋。

4年前に離婚した元夫婦、リモートワークのモトオとスーパー勤めのユキコ。5月の終わりの夜、間違え電話から始まる・4日間の夜のひと時を描く。

“自粛する者”と“するわけにはいかない者”。やがて…この世界は悪いことばかりでは無い…と。

7月23日（木）19：30～、72分、NHKG ☆☆

ドラマ&ドキュメント「不要不急の銀河」

△新型コロナウイルス対策以前“密”であり続けたドラマの撮影現場。△新たなドラマが生まれるまでの人間模様。

脚本：又吉直樹、構成協力：岩井秀人、挿入歌「ファイト」、安全衛生指導：森晃爾、宮本俊明、宮内博幸、立石清一郎、斎藤光正、

出演：リリー・フランキー、夏帆、小林勝也、鈴木福、茅島みずき、リリ花、でんでん、片桐はいり、

ドキュメント…D：坂部康二、P：河瀬大作、制作統括：杉江彦彦。ドラマ…D：井上剛、P：家富未央、制作統括：篠原圭。

パンデミックな日々

新型コロナウイルスのいる日常

千葉邦彦

国の緊急事態宣言が発効した翌日（4月8日）、神様は私に一撃を与えた。椎間板ヘルニアの治療を終えて整形外科を出たところで、突然右膝に激痛が走った。再び院内へ。変形性膝関節症との診断だった。加齢や加重が原因という。腰と膝、故障が重なって歩行に支障をきたすようになったが、「この時期、決して出歩かないように」との御託宣であると受け止めた。仕事はリモートでこなし、実家の母の介護は暫くのあいだ家人に任せることにしよう。かくて、リハビリとヒアルロン酸注射のための通院以外には完璧に外出しない生活となり、テレビを見る時間も増えた。

番組の様子が変わっていく。ニュース・情報番組の出演者たちは互いの間隔を大きくとり、間に透明のアクリル板を立てていたりもする。旅番組は新規のロケ収録が難しいので、総集編ばかり。公開番組は無観客となった。バラエティー番組を賑わせるタレントたちの多くはオンライン参加をしているが、そうまでして他愛ない話を流し続けることに果たして意味があるのか。今は、地に足の着いた話を放送すべきときではなからうか。

NHKGは新型コロナウイルス（COVID-19）関連の優れた番組を幾つも放送している。そのうちの1本、E.T.V特集『緊急対談 パンデミックが変える世界』海外の知性が語る世界』（NHKG・Eテレ、4月11日）は、知の巨星、ジャック・アタリ（経済学者・思想家）が11年前の著書『危機とサバイバル』（2009年）のなかで、「市場のグローバル化や自由な流通により、今後10年で破滅的なパンデミックが発生する恐れがある」『パンデミックは多

くの個人・企業・国家のサバイバルにとって非常に大きな脅威である」と警告していたことを紹介した。アタリはインタビューに答えて、「確率が低くても、そうした声には耳を傾けるべきだし、リスクが高いときには行動を起こすべきなのです」「私たちの生きている時間は短いのですから」と語った。

この社会を構成する無邪気な人々は、何事によらず、先見性のある意見を背を向けてきた。かつて彼らのなかのある者は、「消防署を増やすべきです」と提言する人に、「お前は火事が起きたらいいと思っているのか？」と罵声を浴びせた。「この契約には欠陥があります当社にとって著しく不利ですから、改めましょう」という提案を、「何も起こらなければ、欠陥は知られずに済む。何か起きたら、そのときの話だ。今、事を荒立てて、誰に何の得があるのだ？このままでいい。黙っている」と拒絶した。今日、そのような愚かしさは克服されたと信じていた。ならば、次なる危機を予見している賢者たちの声を聴くべきであろう。

新型コロナウイルスの前に文明は脆さを露呈した。人類は多大なる犠牲を払い、この度のウイルスを見送って、以前とは異なる生活のなかに身を置くことになるだろう。しかし、それとて束の間の安息に過ぎない。何故なら、遠くない将来、さらに強力な未知のウイルスに対峙する可能性があるからだ。そのときまでに、今回の経験を踏まえて、国、自治体、医療・研究機関などはもちろん、個人も十分に備えなければならない。

私は以前、「世の中は、そんなにいいこと」としてはいけないうちに満ちている」と述べた。突き放した言い方になるかも知れないが、新型コロナウイルスの登場を機に、それらを見直しを迫られ、淘汰されるプロセスに入ったように思われる。同時に、したほう

がいいこと”や”しなくてはいけないこと”を重要視する社会への扉がようやく開かれつつあるのではないだろうか。

幼年期の廢墟

新型コロナウイルスが全世界を覆う今、映画『12モンキーズ』（1995年アメリカ監督：テリー・ギリアム、主演：ブルース・ウィリス、マデリン・ストウ、ブラッド・ピット）を思わずにいられない。日本では1996年に公開された問題作で、何度かテレビ放映もされた。人為的に撒かれた謎のウイルスによって人類の99%が死に絶えた2035年の世界で、生き残った人類は地下に潜って生きている。服役中の犯罪者 ジェームズ・コール（ブルース・ウィリス）は何者がウイルスを撒いた1996年に時間転送されることを特赦を条件に承諾する。彼は1996年の世界で純粋なウイルスの在り処を突き止めて入手し、2035年に持ち帰るといふ任務を負う。それは、純粋なウイルスを用いてワクチンを開発する計画にとつて欠かせないミッションなのである。ところが、転送装置の不具合でジェームズは1990年に不時着してしまい、話は振（よ）られていく。

『幼年期の廢墟』はかつての私の言葉だ。1988年6月に初めて訪れたニューヨーク・マンハッタンをそう呼んだ。深夜にダウンタウンで食事をして、ミッドタウンにあるホテルまでの長い距離を歩いた。当時の治安状況を考えれば、向こう見ずな行動だった。昼のあいだ熱を放っていた街を密やかな月の光が冷やし、摩天楼が廢墟めいた影をまといくのを見た。魍魎魍魎の蠢く時間、何者かが物陰からこちらを窺っている気配を感じた。その正体を確かめたい衝動を抑え、通り過ぎた。ホテルに着き、向かいにあった放送局ABCのタワーを振り仰いで安堵したのだった。

そのABCのニュースは今も毎日、『ワールドニュース』（NHKBS1）で見ている。ABCに限らず、欧米のニュースキャスター（アンカー）は皆、自立感が漲っていて、自国や世界の事象を見事に伝えている。欧米では力量に溢れ、経験豊かで信頼性の高いジャーナリストが1人でニュース番組を仕切るのが基本である。彼・彼女はニュースの項目や内容に関する権限を持っている。方や日本では演出上の要請で、複数ないしそれ以上の人間が分担して原稿を読むことが多い。ジャーナリストというより出演者の趣である。

そもそも、この国のニュース・情報番組は、『情緒の海に論理が溺れてしまう文化』そのものに映る。幾人もの出演者たちの間に大切なことがこぼれ落ちるが、それを誰も進んで拾おうとしない。何事も『空気に流れてしまひ、論理的な決着に至ることは少ない。今、そのスタジオはコロナウイルスのために出演者たちが互いの距離を大きくとり、透明の亚克力板で隔てられている。これまでずっと互いの息遣いを感じるほど近くに座り、曖昧さのなかに安住してきた者たちにとっては不自然で不都合な状態といえる。だが、これをひ

とつの契機として旧弊を打ち破り、この国のニュース・情報番組が望ましい方向に変化していけば、今の放送局が『幼年期の廢墟』になる日へのカウントダウンは遠くなるように思うのである。

新しい世界で称える「昨日」

私はよく夢を見る。夢は自分が生まれて以来の記憶を脳が再構成して物語化したものだという。私の夢の登場人物は家族、知人、著名人、架空の人物など多様であるが、7月14日、本稿執筆時点では彼らの誰一人としてマスクをしていない。私が生きてきた長い年月のなかで、誰もがマスクをしている世界に住む時間はまだ1%にも満たず、その記憶の分量が少ないので、夢を構成する要素たり得ていないのだろうか。しかし、いつか夢にマスクをした人物が現れ、やがて全員がマスク姿になるかも知れない。そして、夢の人々は今のところ密な接触状態にあるが、次第に距離をとるようになるだろう。現実世界は時間差を以て夢のなかにも入り込んでくる。

「新型コロナウイルス」は「人が人と会わない世界を作り出した。集まらない、近づけないなか、人と人が離れてコミュニケーションをとらざるを得ない日常となった。このことは「放送人の会」にも少なからぬ影響を与え、会の活動は大きく制約されることになった。まず事務局を開ける目を限定し、在室人数も制限した。約30人が一堂に会する理事会は初めて書面での開催に代えた。定時社員総会は大多数からの委任状を得て、ごく少数の出席者で行った。これまで総会に併せて行ってきた「放送人グランプリ」贈賞式を開かず、個別に賞を渡すという異例の運びとした。

賞の選考自体は会員からの推薦をもとに粛々と進められ、「放送人グランプリ2020」

（選考委員長：西村与志木の各賞と「第6回大山勝美賞」（選考委員長：八木康志）を決定した。委員が集まって口角泡を飛ばす選考委員会が開催できなかったが、委員長が各委員の意見を集約して贈賞案を作成し、今野勉会長の了承を得て決定するというプロセスを経て、変化に富んだ贈賞となった。（「贈賞一覧」は会報No.88（前号）に掲載）

思うに、今回は、『コロナウイルスのいる新しい世界』に住むようになった私たちが『コロナウイルスのいなかった昨日までの世界』で作られた番組やそれに携わってきた人物を称えるという、最初で最後の経験をしたことになる。新しい世界で「昨日」を称えたのだ。このことは記憶に留めておくべきであろう。さて、来年、賞の選考方法はどうかだろうか。コロナ禍が続く限りには、再び今回の方法を採ることもあり得る。もし集まって長時間議論するなら、マスクやフェースシールドだけでは不十分だろう。当面、合理的なのはオンライン会議であるが、オンライン方式で全てが満たされるのかという指摘もある。そう、全てが満たされるどころか、いろいろな要素が欠落したり、変質したりするというのが本当のところだろう。しかし、そのようなことを言っていられない局面にあると考えるのが妥当かも知れない。何事によらず、じかに会って侃々諤々する文化にはもう戻れないような気がしている。（文中敬称略）

【注】今年4月から7月、新型コロナウイルスのいる日常で思うあれこれを綴り、月刊『通信文化』（発行：公益財団法人通信文化協会）の連載エッセイ「放送の100年へ」1925↓2025（7月号、8月号、9月号）に載せた内容の一部を改稿し、同誌編集部了承を得て、ここに掲載した。）

【I】

想定外ということは、しばしばあるものだ。しかし、このコロナ禍は世界的にも日本にとっても、さまざまな個人においても、いろんな想定外を惹き起こしているに違いない。

高齢者にとって、残りの時間をどう生きるかはほとんど最大のそして多分最後のテーマだろう。自宅で過ごす時間が多くなり、ただ茫然としたまま一日が終わる。こんな風に自分の時間が消費されてしまつて良いのだろうか、と思う。かといって、コロナがなかったら日々どれほど納得した時間を過ごしていただろうかとさえ、大したことは何もなかっただろうとも思う。

この年で今更焦っても仕方がないのだが、人の世と自分の有様についてただ呆然と眺めつつ過すしかないのだろうか。「方丈記」でも読んでみようか。しかし、鴨長明はただ呆然と諦観していたのではなく、実にまめに厄災の現場に足を運んでいたのだった。読むべきは、そのようなことが書いてある「方丈記私記」（堀田善衛）にしよう。名著だ。

と思いつつ、本棚を眺めていたら、ある本の所で眼が止まった。思い出したフレーズがある。

「詩を改竄するとう醜い行為をやめさせるためには、単なる立て直し（ペレストロイカ）だけではなく、ひとつの国家の崩壊が必要だった。」（「マヤコフスキー事件」小笠原豊樹 河出書房新社 2013）

では、こんなのはどうだろう。

設問 この文章の「詩」を「公文書」に置き換えた時、その後続く文章はどうなるか、現在形であなたの考えを書きなさい。

現代文の試験問題みたいだ。ペレストロイカ後の国家が何であるかという問題はあっても、である。

詩人マヤコフスキーの死はスターリン権力による強いられた死だった。この国の公文書改竄は、一人の人間に自死を強いた。

コロナの時代は、こういう時代でもあるのだ。時代が病んでいる。

【II】

と、ここまで書いて編集長に送つたのだが、「学術会議 問題が起こった。映画人 22人が声明を発表している。」

「日本学術会議への人事介入に対する抗議声明」

（略）「憲法23条は「学問の自由は、これを保障する」と定めています。この規定は、単に個人が国家から介入を受けずに学問ができることだけでなく、大学など公的な学術機関が介入を受けずに学問できることまで保障しているとの考えが通説になっています。」

元々、日本学術会議は、第二次世界大戦に科学が協力したことを反省し、1949年に設立されたもので、内閣総理大臣が所管し、経費は国費負担としつつも、独立して職務を行う「特別な機関」と位置づけられました。

除外された6人の候補者は、安保法制や共謀罪に異を唱えた学者たちです。今回の任命拒否は、会議の理念を踏みにじるだけでなく、

「会議の自律性とそれによって守られる学問の自由への挑戦」であり「政府に批判的な研究者を狙い撃ちにし、学問の萎縮効果を狙ったとみられても仕方ない」（江藤祥平上智大学准教授）ものです。

（略）

この問題は、学問の自由への侵害のみに止まりません。これは、表現の自由への侵害であ

り、言論の自由への明確な挑戦です。

それは今に始まったことでなく、安倍政権の7年8ヶ月間続いている、そして、「あいちトリエンナーレ」の助成金一時不交付から顕著になったことだと考えます。

今回の任命除外を放置するならば、政権による表現や言論への介入はさらに露骨になることは明らかです。もちろん映画も例外ではない。

（略）

私たちはこの問題を深く憂慮し、怒り、また自分たちの問題と捉え、ここに抗議の声を上げます。

私たちは、日本学術会議への人事介入に強く抗議し、その撤回とこの決定に至る経緯を説明することを強く求めます。

2020年10月5日

青山真治 荒井晴彦 井上淳一 大島新 金子修介 小中和哉 小林三四郎 是枝裕和 佐伯俊道 白石和彌 瀬々敬久 想田和弘 田辺隆史 塚本晋也 橋本佳子 古舘寛治 馬奈木敏太郎 三上智恵 森重晃 森達也 安岡卓治 綿井健陽

放送人はどうする。

「表現の自由」というだけでなく、文化の自立の問題でもあろう。放送法4条問題が具体的事例であるように、政治は放送を管理しようとする。会員の自主自立を基本としている私たちにあって、個人としての放送人はどう時代に向き合うのか。私たちは、天皇機関説事件から大政翼賛会に至る時代を歴史的経験として知っている。

「時代は病んでいる」と書いたが、病んでいるのは私たちが。

今年はいつもと様子が違うが、いつも秋になると星や月が輝き、天の川らしきものがあるやりと浮かんだりする。子供の頃からSF好きな自分も天空を見上げながら空想の旅に遊んでいたものだ。しかし、パンデミック渦中、今秋初めテレビに取り上げられたSFものは、小松左京「復活の日」という地球舞台のリアルなものである。元々1964年4月に発売されたこの作品、折しも東京オリンピックの年というのが不思議な符合である。感染症が地球に広がり、生き残る人達は南極越冬隊だけ、団結して復活の道を探る。番組化したNHKBSアナザーストーリーでは、様々な角度で意図を読み解く。元々SFは空想科学小説で「ありそうな嘘をつく」のが持ち味、分析では、ウイルス学者の解説で感染症部分がいかにリアリティに満ちたものかを解き明かしていた。同じ作者の「日本沈没」もそうだが、予見に満ちた説得力のある警告はSFの持ち味である。

この放送の約10日後、今度はE.T.Vで今年アメリカにて制作された第二次世界大戦中の実話が放送された。「K症候群」という、1943年ローマで実際あった話をドキュメンタリー化したものである。この時期ナチスはイタリアに侵攻しバチカンまで迫ってきた。ユダヤ教徒を守る為病院の3人の医師がアイデアを出す。世にも恐ろしい「K症候群」という病気をでっち上げ、教徒を病院に匿ったのだ。患者の様子を見て確認しようにもいまいひとつ踏み切れない兵士達…そのやりとりは、生死を分ける真剣な勝負で、その位感染症の恐怖はヨーロッパで浸透していたのである。これは嘘が命を救った。

そして秋も深まり10月中旬、絵画展「ロン

ドンナシヨナルギヤリー展」が幕を閉じた。だ
が目玉である17世紀の画家フェルメールの
最後の作品とされる「ヴァージナルの前に座
る女」は見るのが出来なかった。コロナ禍中
入場制限で煩わしかったからだ。テレビ
番組では楽しませてもらった。その「美の巨人
たち」は、まさにこの時期ならではの造りで興
味深い。オランダの小都市デルフトにフェル
メールと同年に生まれたアンソニー・ファン・
レーエンフックという科学者を同時に描く。
彼は顕微鏡を發明し、「微生物学の父」と言え
る。まさに今の時代に繋がる存在なのだ。そし
てフェルメールとの関係は、彼の遺産管財人
であることで立証される。

フェルメールの代表作「物理学者」「天文学
者」のモデルという説もあるが、これは真偽不
明だ。また、光の魔術師フェルメールの作品は
カメラ的なものを利用したとされるが、彼が
介在していたのかも知れない。いずれにして
も謎が多い二人の巨人である。

時代が激しく動く時、特に科学が発達する
時疫病が生まれるとされる。自然と科学の摩
擦からなのだろうか。様々な番組を見て思っ
た。「コロナ」という存在も不思議だけれど、それ
にとりつかれる人間も不思議な存在だ。

コロナ禍の中の世迷い言

渡辺 紘史

人との密な空間

コロナ禍の今、テレビ、映画、演劇などの制
作の現場でも、大変な状況が続いている。多く
の人に取材し、多人数が集まり、口角泡を飛ば
し議論し、一つのテーマのもとに、手作りの表
現を経て出来上がる仕事から、「人との密な空
間」が奪われたからだ。担当する番組や作品を
これまで通り作り続けていかねばならない制

作者たちには頭が下がる。

それとは比べようもないが、ボランテイア
世界の私の仕事も「人との密な空間」での活動
である。脚本賞の贈賞式、作品上映とシンポジ
ウム、そして当会の事業「人気番組メモリー」
は、未だ宙に浮いている。いずれも3月実施を
予定し、チラシも作成し、本番を待つばかりに
なっていた。また、私の属する団体の6月予定
の事業は中止、来年2月予定のドラマ顕彰事
業は公開をあきらめ、無観客テレビ中継を想
定して準備を始めた。なお、その団体の理事会
や委員会は、我が家のPCを介したオンライン
会議となり、今も続いている。

単こもり期間中、何もできないでいた私は
「こんな時こそ、じっくりと長期的展望に立
つて、計画を立て直す時期と考えればいい、前
向きに」と、団体の仲間と語ったりもしたが、
それは、愚図ながらせつつかない自身に向けて
の発言でもあった。しかし、それから半年、そ
んな前向きな気持ちは、なんとも中途半端な
まま、宙に浮いている。

コロナ禍の夏、突然の政変劇

第2次感染が始まった猛暑の中で起こった、
突然の政変劇の所為である。コロナ対策に右
往左往した挙句、安部首相が突如辞任し、密室
の決定によって菅総理が就任するという、コ
ロナと疾病を利用しての大芝居だ。政権退陣
となれば、「モリ」「カケ」「サクラ」の総括検
証が始まるとの期待も叶わず、その継承をう
たう政権の誕生で、安部政権支持率30%台か
ら菅政権支持率が倍増するという、目眩まし
のような見世物劇に目を奪われてしまったの
だ。そして10月、突如起きたのが、日本学術
会議の会長任命拒否問題である。文化や学術
の政治への従属を強いる強権的やり方だ。そ
してそれから2週間、この稿執筆の今日、10
月15日の朝日新聞は、文科省が全国の大学に

むけ、中曽根元総理の政府自民党合同葬議に
弔意の表明を求める要請をしたと報じた。科
学、芸術、学問に対しての、常軌を逸したあか
らさまな思想統制である。国会が開かれてい
ないこともあり、未だ拒否の理由や経緯の説
明がない(できない)ことから、この真相や
今後の政権に与える影響などは不明だが、こ
の問題は、(例によって)ネット上で、ある識
者がブログやツイッターでこう言った、それ
に対し誰がどう反論したかに、多くの閲覧者
(ネットユーザー)が反応し、コメント参戦す
る様が面白おかしく紹介され続けている。

NETSNSの過激さと政治への悪用

最近私は、この政変劇を「オペラグラス」で
見ようと、ネットを覗き込むことが多いが、そ
の内容は、原典、全文見ずしての誤解、曲解、
我田引水、片言隻句への言いがかりに満ちて
おり、その表現も極めて攻撃的、脅迫的で、殺
伐としているのに驚愕する。もちろん、ネット
の情報のすべてがそうではなく、細かく正確
で、ルールをわきまえた行儀正しいものが普
通であることを承知している。ただし、危惧さ
れるのは、トランプ大統領が、自身の岩盤支持
者に向け、ツイッターを通じて過激なフェイ
クを繰り返して、支持を固めているのと同様、日
本においても、政治のネット利用は、改めて危
険であることだ。今回の政治家と識者、ユーザ
ー達の、プロレスの場外乱闘の如きバトルか
ら見てくる、今回の任命拒否問題は、あえて
ネット的(短絡的恣意的)に推論すれば、以下
のような解釈もありうるのではないか。一現
政権の支持層の多くが、自身がトリクルダウ
ンのおこぼれも得ていないにもかかわらず、
汗をかくて頑張る(政権)政治家と体制を支
持することで、仲間として優遇されると信じ
ている。故に、(汗もかかず)学問に胡坐をか
く知識人(インテリ)や、(教養ある)メデイ

アから批判されると、上から目線で自分が非
難されていると感じ、憤り、同調圧力を強め、
二項対立を煽ることによって、(サヨク)親中
「親韓(反日)」とレッテルを張り、激しく攻撃
する。もちろん反対する側も同じレッテル張
りのやり方で攻撃するのだが、いずれにしても、
政権はそうして出来上がる民意によって、こ
の任命拒否は、必ずや支持されると自信を持
っている。それは明らか、川勝平太静岡県知事
の「菅首相の教養レベルが露呈した」発言を引
き出すことにより、庶民宰相のイメージを、よ
り際立たせ、学術会議のありよう検討という
カタチで、学術学問封じに拍車をかけられる
——とまで考えたのではないか。もちろん
これは、面白すぎる推論だが、前例にとらわれ
ず行革を進めるとの威勢いい声に応じて、さ
つそく昨14日、「学術会議のありようを検討
する云」が開かれたことから見ると、あながち
間違っていないと思えてくる。我々は、民主主
義とは常に批判反対を前提として、その合議
を以て進めて行くものと教えられてきたが、
もうここまで来てしまったのかと唖然とする
ばかりだ。

我々はデジタルネット時代に漂っている

余談だが、私自身はSNSをやらぬ。しか
し、仕事上参加せざるを得ないLINEでの
やり取りを経験して、70代80代のいい年をし
た仲間が、何故かアイコンマークを使い、猫な
で声風なやり取りを見て当惑することがある。
以前から思っているのだが、私が使うメール
での自身の文章ですら、直接書く手紙や話し
言葉と違い、品下る表現となってしまうこと
が多いのは何故だろうか。

ちなみに、私が初めてワープロで企画書を書いたのは、平成元年、今から31年前である。その頃の制作者たちは、文献資料を漁り、ノートを取り、多くの人に会って取材し、企画書を書き、手作りで作品を作った。今どきは、いくつものタグから、ウィキペディアをコピーし

て企画書を作り、リモート画面にデジタル処理を施し構成する作品を作ることも可能だ。私達は、こうした時代に漂っている。

「人との密な空間を大切にしたい、当たり前で、豊かな生き方」

知識をいち早く獲得し、情報を素早くやりとりし、ここをスピーディーに処理する。現代社会の当然の進化であったはずのデジタル・ネット時代であって、それが社会の分断や対立、政治のポピュリズムを加速させることになれば、引き返しはできないまでも、冷静で客観的な検証を加えることも必要だ。の「キャンペン」でも、の「ゴイート」でも、老人たちに多いネット弱者に恩恵は行き渡らない。コロナの中にあつて、オンライン作業ができる人だけではない。ラッシュに揺られ、人ごみの中で実働を強いられる人たちが多いことも知るべきだろう。

よく言われるように、アフターコロナの時代の生き方が、こうした時代の延長のままで「人との密な空間」を保ち、自制と自助の生活を人々に強いるものだとすれば、私は反対だ。「アフターコロナ」の時代は、コロナを撃退するであろう、現代の科学や医学を信じ、ゆくりでもいい、間違いない正確な知識で物事が解決され、知性を重視し、「人との密な空間」を大切にしたい、当たり前で、豊かな生き方を望みたい。それは世界を旧に復するのではなく、知性の再生＝ルネサンスであると思うのだが、ここまで来てしまった時代にあつて、こうした望みは、アナログを懐かしがるアナクロ老人の世迷い言と断じられてしまうのだろうか。

なお、本来この稿は、コロナによって積み残してしまった当会事業の今後の展開や長期戦略について記すつもりでしたが、上記事情により、全く違ったものになってしまいました。当会の事業については、今、皆さんと議論中で、年内に改めて提案します。

ラジオのページ

コロナ禍の沖縄であれこれ思つたこと

天野諒範

唐招提寺八二世長老を戒師に賜り得度して一九年がすぎた。唐大和上東征伝で、七五三年に日本へ向かう途中、鑑真和尚を乗せた四艘の遣唐使船が沖縄島に停泊していたことを知った。

どこの港に停泊していたのか知りたくなり、この港だろうと思う西海岸の漁村を探し、毎月通う生活をしていたら、大陸からのコロナウイルスにより、ナイチャー（内地の人）は、遠慮してください・ということになった。

探し当てた町は、島尻郡与那原町人口一万八千六百人の漁村だ。

先の戦争の前までは中城湾に面する天然の良港として知られ、山原船が出入りし、沖縄では初めての軽便鉄道が那覇まで通じていた。当時の駅舎が現在歴史資料館として整備されている。

大正十年三月六日に東宮殿下ヨーロッパ外遊の途中沖縄に立ち寄られたが、お召鑑香取の艦長は沖縄出身の漢那憲和でした。

与那原の浜には仮棧橋が建設され、殿下は伝馬船に乗り換えられ棧橋に到着され、歩いて上陸されている写真が残っている。その後与那原駅から那覇に向かわれた。ヨーロッパへは再びこの港から出航されている。二年ほど前にその記念の碑がえびす橋近くに再び建てられていて、昔から重要な港であったと思われる。

ところで、琉球王国の第一尚氏は、尚思紹王の子の尚巴志で、中山王となる。彼はこの町の南にある佐敷から上陸し、与那原港に出入り

する異国船鉄を買ひ、製造した農工具配布することで民心を得て、三山時代の後に沖縄本島を統一した。佐敷城跡は今もある。

日本では応仁の乱のころ、この地も乱れて尚巴王が第二代の尚王となり、三代目の尚真王の時に再び統一王朝ができ、現在の状況となる。佐敷から与那原町までの海岸には、大陸から漁船が来て交流していたようで、船の犠牲者を奉る御嶽がみられる。

まだいくつも書きたいが、長老からは学者さんにも調べてもらいなさいと言われ納得しているが、これからも探し続けたい。

さて、ナイチャーと呼ばれる内地の人には知られていないが、沖縄県には新聞が六紙ある。共同の配信を受け論調が同じような琉球新報と沖縄タイムスが良くも悪くも有名。それ以外に宮古島、石垣島の八重エリアにそれぞれ二紙で計六紙。テレビはTBSが放送されていないが、ラジオはラジオのおかげで聞くことができる。

宮古毎日新聞は那覇支社を置き、県全体の政治経済社会に気配りし、保守中道の論陣を張り、本社では島全体の日常をきめ細かく正確に報道しているのがわかる。電子版などへの対応も早い段階で実施しており、中学のころからラサール、東大理系、法系で学び、電源開発系仕事をこなしていた若い経営者の実力は、県内で高い評価を受けているのがわかる。

同紙の最近の記事から話題を拾ってみよう。宮古島では、九月七日「白露の使者」とされている「アカハラタカ」が飛来してきた。中国北東部で繁殖して、毎年このころ越冬地のフイリピン以南へ渡っていくが、この島が休憩地だ。ナイチャーは佐世保市の烏帽子岳で観察できるとのこと。台風が来る前は大群が大空を乱舞する。この頃は島ではマンゴーの出

荷で大忙しでもある。

今年マンゴーの売り上げが、通信販売の売り上げ増もあり過去最高を記録した。

この宮古島では、「久松五勇士」の碑が有名だ。ロシアのバルチック艦隊が北上するのを島民が発見し、平良市久松の五人の漁師がサバ二船で電信設備のある石垣まで十五時間かけて知らせたことを記念した碑だ。地域では今でも子供たちが記念の踊りをする。

コロナ騒動も、理系の経営者らしく丁寧な数字を記事にして、十万人当たりの感染者数で沖縄県は一位などといった記事もあり、宮古島の初めての感染者は七月三十日。紙面にはマスクをしていない知事さんたちの写真や辞令交付式の写真もあり、記事ではなく写真で報告。なかなかの知恵の経営者に目が離せないでいる。

(僧侶・元 J-WAVE)

今こそラジオに熱いエールを

高田宏

最近、インターネットの普及によってラジオを取り巻く環境はさらに厳しさを増している。

ローカル・ラジオの中に、今年閉局した会社が2社あつた。

ひとつは、新潟県民エフエム放送株式会社(愛称「FM・PORT(エフエムポート)」)、もうひとつは、愛知県の株式会社Radio NEO(レディオ・ネオ、以前の愛称は「InterFM・NAGOYA(インターエフエム・ナゴヤ)」)が、両局とも今年の6月30日に閉局した。

そして、9月には在京のInterFM89.7(木下工務店グループ)の発行済み株式のす

べてを、ジャパンエフエムネットワーク(全国FM放送協議会(JFN)系FM局38社の出資による番組制作会社)が取得した。

この一連の動きを見ると1951年の日本初の民放ラジオ開局以来69年を経て、民放ラジオにとって激動の時代が幕を開けた観がある。

話しは20数年前に遡るが、インターネットが世界に出現した頃、メディア総合研究所の柳沢健氏(故人)文化放送出身をリーダーに、民放ラジオ各局から10名程のメンバーで、米国内で開かれた「全米ラジオコンベンション」と米国内のラジオ局数局を見学するツアーに、私も参加した。米国は車社会で、ドライバー向けラジオは繁栄していた。ボタンを押せば、好きなジャンルの音楽が流れ、ニュースが聴け、スポーツが聴けた。

米国の大都市には、それぞれ100局程のラジオ局が存在し、そのひとつひとつが特色ある編成で、個性を競い合っていた。ボストン市内のホテルを借りきり、各部屋にデモンストラーション・ブースを造り、我々を楽しませてくれた。

柳沢健氏は、キッズラジオのブースに先頭を切って入り、子どもにかえったように、大きなキャラクターとともに楽しんでた。次の日からは、健氏に導かれて、各都市のラジオ局を訪問したが、日本からやって来たラジオの同業者として、心からの歓迎を受けた。

ニュース専門局では、フロア中央の一段高い位置に大柄の女性プロデューサーが陣取り、その周りを囲む編集記者からの生原稿に赤を入れスタジオブースにいるDJに渡す。DJは、選曲・CM送出など番組運行の全てを引き受け、隣のブースに居る交通情報リポーター(この時のリポーターは元婦人警官)との掛け合いで、生放送を進行する。日本に比べ、合

理化された運行と技術のシステムで運営していた。営業成績はグラフが廊下に貼り出され、10名程の営業マンがしのぎを削っていた。

さらにこのツアーは、サンフランシスコにあった全米最大のシンジケート(ネットワークを介さずに番組を独立局や地方局に直接販売するシステム)のWestwood One(ウェストウッド・ワン)も訪問した。

この会社は大きな衛星アンテナを有し、全米に、人気番組編成プログラムを送信していた。全米では、70代のラジオDJがたたく活躍しているとのこと。米国のラジオは、免許制ではなく、都市エリアの電波(周波数)さえ空いていれば開局可能で、日本の免許事情とは大きく違っていた。いわゆる、自由競争である。30代の社員は、日本の同業者である我々を大歓迎してラジオ局内中を案内してくれた。そして我々は、日本においてもラジオの可能性を大いに感じて帰国した。

あれから20数年が経ち、ラジオを取り巻く環境は大きく変化した。冒頭で紹介したように、民放ラジオには、閉局するラジオ局まで現れている。最大の変化は、日本でもインターネットがより身近なものになったことである。しかし、インターネットの普及がラジオにとってマイナスの影響だけとは限らない。Podcastをはじめ、オリジナルの音声コンテンツ(ラジオ番組)がネット上に溢れている。これに、広告代理店やクライアントも注目している。新しいDJやパーソナリティも生まれている。

日本のマスメディアの中でも、ネットユーザーが一番身近な存在になっているのが、ラジオだ。面白い話題になっているPodcast。スマートフォンやタブレットなどのデバイスで全国のラジオ局の番組を楽しめる。月額35

0円(税別)でだ。これにより、新しいラジオファンが増えている。また、ラジオパーソナリティは、担当する番組が大都市・地方の放送局に関係なく、全国から人気を集める人も出てくるだろう。Podcastの発展はとても楽しみです。

2014年の9月に「放送人の会」の中にラジオプロジェクトを立ち上げ、我々ラジオ制作に関わった31名でスタートを切ったが、その後メンバーも増えている。プロジェクトのメンバーは、二ヶ月に一度、各局を訪ねたり、話題のラジオ番組をカラオケBOXに担当プロデューサーを招く「ラジオ聴き酒の会」を実施している。番組制作の苦労話、リスナーからのうれしい反響などをうかがい、プロジェクトのメンバー全員がラジオ番組への関心を新たにしていく。

さらに「ラジオ聴き酒の会」を中心に聴いた今のラジオ番組やパーソナリティの中から、年に1回「放送人タランプリ」に推薦している。我々ラジオプロジェクト「ラジオ応援団」から現在活躍中のラジオマンたちに今こそ熱いエールを贈りたい。

(株式会社東京エンターテイメント取締役・放送人の会 会員)

放送文化基金ラジオ最優秀賞作品

「ねじれちまつた悲しみに」制作

裏話

増山麗央

2019年5月に亡くなった思想家・文芸評論家の加藤典洋さんは「敗戦後論」アメリカの影「9条入門」などで、平和主義を唱えながらも世界で戦争を続ける米国に従属するという戦後日本の「ねじれ」を指摘し続けてきました。番組が放送されたのは、時あたかも現議院選挙、さらには憲法改正の国民投票も現

実化してきた2019年の夏。戦後日本の「ねじれ」の原点でもある日本国憲法第9条の誕生について書かれた「9条入門」を手に、作家小川哲さんの「加藤典洋」を巡る旅に、このような荣誉ある賞を頂きとても嬉しく思います。

加藤典洋氏は優れた現代思想家でもありましたが、明治学院大学、早稲田大学で教鞭を執り、学生を愛し、学生から愛される「先生」でもありました。ちなみに、この番組を企画したのは、加藤典洋ゼミを卒業し、TOKYO FMに入社した営業マン藤岡泰弘。恩師の訃報を聞き真つ先に「追悼特番を作りたいです」とゼネラルプロデューサーの延江浩に相談したのがこの企画のスタートです。

番組作りはワークショップ形式。「加藤先生は自分の思想を学生に押し付けるようなことはしてこなかった。学生の肩の位置まで降りて、一緒にものごとを考えてくれた。そういったゼミの空間は知的好奇心をくすぐるものだった」という藤岡をはじめとする、番組スタッフは会議室に集合し、「9条入門」を読むところから番組制作は始まりました。

2019年参院選の街頭演説、8月15日の靖国神社などの東京の街風景を歩きながら、長年加藤典洋さんが指摘してきた様々な「ねじれ」について、小川哲とスタッフは真夏の日差しの下を歩きました。与克と野克のねじれ、政治と文学のねじれ、改憲と護憲のねじれ、男と女のねじれ。暑さと難解さで頭の中もねじれてしまうよう…。そんなねじれにねじれる我々に、知の道しるべを示してくれたのが、マイケル・エメリックさんと、上野千鶴子さんでした。

戦後日本の内部に潜む「ねじれ」の正体を考

察した『敗戦後論』は国内にとどまらず、海外でも議論の種となりました。「加藤典洋氏は日本が抱える大きな問題を、冷徹な手さばぎで突き放すように分析するのではなく、生涯をかけて『付き合ひ』ように捉えていた」という、加藤氏の翻訳パートナーであったカリフォルニア大学ロサンゼルス校教授のマイケル・エメリックさんにもお話を聞きました。

「加藤典洋さんはポスト江藤淳」そう言ったのは長年ジェンダーの研究を行い、折しも2019年の東京大学の入学式で男と女のねじれを例えに祝辞を述べた、上野千鶴子さんです。「加藤さんの訃報を聞いたとき、息が止まりそうになりました」という上野さんに受賞の報告をしたところ、「戦後のわたしたちの出発点にあった『ねじれ』を忘れてはならない、と警告しつづけた加藤さんを、わたしたちが忘れないために作られた番組です。ふたたび巡る敗戦記念日の前に、この番組が受賞しうれしいと思います。」とお祝いの言葉を送ってくださいました。

このように、加藤典洋さんへのラブがいっぱいの「ねじれちまった悲しみに」が第46回放送基金賞ラジオ部門の最優秀賞という名誉ある賞を頂いたのは、戦争を知らない私たちが「戦後」という概念を「他人事化しない」という審査員の激励でもあるのでしょうか。同じく放送文化基金賞で優秀賞を受賞した文化放送報道スペシャル「戦争はあった」も、戦後を巡る物語だったのも、何か縁を感じます。

最後になりますが、上野千鶴子さん、マイケル・エメリックさんを番組と繋いでくれた新潮社の寺島哲也さん、インタビュアーを受けてくれた元加藤セミの長瀬海さん、ディレクター

の伏見竜也さん、膨大な資料をまとめてくれた伊藤慎太郎さん、構成作家の西澤史郎さんに心より感謝を申し上げます。

(TOKYO FM編成制作局チーフプロデューサー・放送人の会員)

NHKラジオ統合に断固として反

対する

三原治

8月のことですが、公共放送であるNHKが、来年度からの経営計画案を公表しました。3年間で事業支出を約500億円削減するようです。衛星放送はBS1とBSプレミアム、BS84Kの3チャンネルを2つにし、将来的に1つにすることも検討するとか。2チャンネルあるAMラジオは一つに集約することです。

NHKは、約7000億円という潤沢な受信料に支えられ、超高精細の4K・8K放送や、インターネットへの番組の常時同時配信などを進めてきました。今回、これまでの業務拡大路線を大きく転換することとなります。

民放からは、「肥大化」への批判が高まり、総務省は「業務のスリム化・受信料の見直し・ガバナンスの強化」を求めています。そのような批判、指摘への「回答」のつもりで出したのでしょうか、問題大あります。

まず、民放と競合する番組の洗い出しをしないまま、チャンネル数を安易に削減する姿勢はいかがなものでしょうか。

衛星放送では、世界の動きを伝えるニュースや良質なドキュメンタリーへの評価は高いのです。AMラジオは、災害時の重要な情報インフラです。語学講座もNHKならではの特色というのが利点です。

ウィキペディアからの情報です。NHKの

ラジオ放送は1925年3月に開始された時には1つだけでしたが、1931年からこれを2つに分けました。スタート当初から講座番組など教育放送を主とした番組編成でしたが、ラジオ第2放送の普及が東京・大阪・名古屋の3都市に留まったため、1939年に「都市放送」と改称し、都市知識層向けのより高度な教養・講座番組や文芸・音楽番組に力を入れた編成に改められました。

その後、1941年12月の太平洋戦争開戦により、都市放送は一時休止されましたが、終戦直後に再開しました。学校放送や教養・文化番組などを主としながらも長時間の番組が柔軟に編成できることから1960年代末ごろまでは、プロ野球や大相撲などのスポーツ中継も行われていました。また、クラシック音楽の演奏会も単発で録音中継され、FM放送が普及するまでは、ラジオ第一との連動で2波によるステレオ放送（当時は立体放送と呼ばれた）が『立体音楽堂』などの番組で実施されていました。

教育テレビが全国に普及すると相まって、次第に教育テレビのラジオ版という性格付けがなされ現在に至っています。

なお、1980年代前半位までは「ラジオ農業学校」（農業経営や栽培技術などを単発で紹介する情報番組）、「漁村の皆さん」（漁村からのお便りや各地の水産市場情報、船舶の海上試験の様相を紹介するという週7日×再放送の情報番組）など、戦前からの流れをくむ産業支援番組もありました。

歴史的観点からも第二放送は貴重な存在です。改めて、このAMラジオの第一放送と第二放送を二波に統合する方針には、断固として反対したい。この二波を削減して、NHK全体の事業のスリム化にどれほどの影響があるのでしょうか。500億円削減のいくら

がAM二波削減費なのでしょうか。AMラジオの存在意義は、災害発生時にその優位性が明らかです。

NHKラジオは、防災情報の伝達手段として大きな役割を果たしてきました。音声のみラジオは、テレビよりも簡単に番組の放送予定や内容を変更できるため、災害の状況に応じて情報を発信できます。ラジオ放送の設備の被災を想定して二波を確保しておくことは重要なことです。

近年の災害では、避難所でスマートフォンを利用する際の電源確保が課題になっています。ネットで情報を探せるスマートフォンは有用ですが、充電しなければ長時間使用はできません。その点、省電力のラジオは乾電池だけでも何日間も連続で聴取できます。

ラジオの底力をお忘れでしょうか。終戦直後の1946年からの『尋ね人』『復讐たより』『引揚者の時間』の3番組は、聴取者から送られた、太平洋戦争の混乱の中で連絡不能になった人物の特徴を記した手紙の内容をアナウンサーが朗読し、消息を知る人や、本人からの連絡を番組内で待つ内容でした。当初は対象者別に3番組が設けられていましたが、やがて『尋ね人』に集約されました。放送期間中に読み上げられた依頼の総数は19,515件であり、その約3分の1にあたる6,797件が尋ね人を探し出せたとされています。日本放送協会は、戦争に加担しました。それは汚点です。しかし『尋ね人』は、日本放送協会だからこそ、個人に向けて情報を送ることができたのです。これは、NHKしか出来ません。

さらに第2放送での語学放送は多くの人に支持され、英会話を学ぶ大勢の聴取者が英語や外国語をマスターしてきました。語学放送は、テキスト代だけで済むのでコストパフォーマンスも高いのです。統合で、語学放送が減

らされたら、日本の語学教育にもマイナスです。

他にも、NHKラジオオアークイブスや視覚障害ナビラジオ、社会福祉セミナーなど、公共放送だからできる番組も残してほしいです。

この先、民放のAMもFMに転換されていく方向です。AMはFMに比べて遠くまで届く利点があります。送信設備に広大な平地が必要で、水害に遭いやすい欠点がありますが、NHKだけでも将来的にAMは残していただきたいものです。

音楽配信なども参入し、ネット経由の音声メディアは多様化していますが、ラジオはライフラインの重要な一つであるということは忘れてはなりません。

このままラジオ第2をなくしていいのでしょうか。(日本大学芸術学部非常勤講師・放送人の会理事)

第80回放送人句会

令和2年10月5日(月) ◇於 赤坂・麦屋

出席 星野高士 伊藤規郎、林備後

鶴橋康夫、中村フミ、佐々木光野 深尾一化

近藤久二 以上8名

兼題 秋風 新酒 菊 パン(業界用語)

「星野高士特選」

長き影肩のあたりを秋の風

菊一基生のお寺の空舞台

けふこそは馴染みの暖簾こしし酒

銭湯に子どももの丈の菊の鉢

船頭が新酒を水の如く呑む

匍匐して夜の街にて今年酒

寄席はねて師匠と交す新酒かな

来年は五輪必ず秋の風

「星野高士選」

野の花にいばりかかりし秋の風

家居よき猫とテレビと新走

国費より大動位葬菊花盛

パンナツせるその先を秋の風

パンダウンして盃に新酒受け

秋の風ケンとメリーの木の遙か

菊日和眼鏡どこにかくれんぼ

菊日和アルツの妻の澄んだ声

新酒酌むよくぞコロナ禍生き抜ける

喜寿近し好きになれない菊の花

句集祝ぐ上司南部の新走り

逢いに行く白菊上げることにして

夕暮れて一ツ木通り秋の風

根府川の駅を吹き抜く秋の風

マスクするトランプをパン秋風裡

もうひとつこだま重ねて秋の風

バリケード寄り添ふ野菊6号線

新人監督秋こだわりのパンカット

新酒酌む立山茅舎なみのをと

あきのかぜ哀しみの端持たされる

「会員互選」

パン終はり芒野原に鳥立ちぬ

「くにさん」と呼んで野菊に隠れおり

鉄塔をパンアップして羊雲

新しき酒酌める身のありがたし

こしし酒雨夜にはぐれ猫の泣く

新酒の祝いの歌の短けれ

散る紅葉パンして相手を見失う

街頭のデモ鎮静し秋の風

九寸五分錆びてこはれて秋の風

「選者吟」

閉校の窓に秋風ぶつかれり

パンして菊の舞台はそのままだに

菊生けて足りないものに風と闇

菊生けて足りないものに風と闇

交々の縁大事に酌む新酒

リモートの下は映らず新酒置く

閉店時間少し伸びれば新酒酌む

金風に祇園小路は夜を待つ

星野 高士

次回放送人句会

○令和2年12月1日(火) 17時半頃から

投句締切18時半

○会場 赤坂・麦屋

○兼題 息白し 闇汁 クリスマス

ミスキャスト(業界用語)

【句会後記】 10月5日は2月以来の句会となり、8名の参加を得て大いに盛り上がりまし

た。また、長く講師を務めていただいた星野高士先生には最後の会で、感動の一タとなりました。先生からは「個性豊かな人たちの集う素晴らしい会である」とお褒めの言葉を頂戴しました。星野先生、本当に長い間ありがとうございました。機会があれば是非またお出でいただきたいと存じます。 幹事・深尾一化

追悼

加納孝夫さんのこと

前川英樹

凄く良い人だった。とても優しい人だった。もう少し俗人的だったら、技術部門の要職に就いていただろうに、と思う。だけど、そうならなかったところが、加納さんたる所以であらう。

初期のTBSの制作技術を支え、(ドラマのTBS)には欠かせない人だった。

わたしが加納さんを知ったのは、それから何年も後の総合開発部時代だった(1980年代)。制作局から異動してきた私は、新規事業分野の基礎的な知識、例えばテレビは何故遠くの事象を同時に映像伝送することが出来るのか、地上波とは何を意味する用語なのか、などについて何も分かっていなかった。これから民放がBS参入しようとか、ケーブルテレビの普及にどう関係すればいいのかという時代に、テレビ技術の基本を知らなかった。走査線とか飛び越し操作とかアスペクシレシオとか一秒間のフレーム数とか、などなど。

そのセクションは、各部門(報道、営業、技術、など)の出身者が構成されていて、夫々民放の歴史を背負った個性的な人たちが集まっていたが、何か新しいことに向かおうという熱さはなかった・・・と言いつつ先輩には申し訳ないが、私にはそう見えた。何かを始めようと思えば、基礎的な知識は欠かせない。それぞれの分野の出身者に色々聞いて回った。テレビ技術について、加納さんは誠実に懇切丁寧に技術の基礎を教えてくれた。一つの質問に十も二十も、手を変え品を変えて説明しているうちに、ついには知りたかった最初の質問はどこかに行ってしまうことがしばしばだった。加納さんは、素人の無邪気な質問ほど草臥れるものはないと思つたに違いない。

でも加納さん、あなたの誠実さは貴重だった。私の疑問は解決しなくても、そういう会話をしながらとてもいい時間を過ごせた。それが新しい分野で何とか生きていくために大事だったのだと今では思っている。ありがとうございました。

最後に一つ。 TBSというよりはテレビの歴史にとつて

欠かせないエピソードを。

「ハノイ 田英夫の証言」(1967年 TBS)という番組があった。

ベトナム戦争が激しくなり、アメリカによる北ベトナム爆撃(北爆)の最中、日本のテレビジャーナリストとして最初にハノイに入ったのが「TBSニュースコープ」のキャスター田英夫氏だった。当時は、ENGはなく、取材は全てフィルムだった。その取材フィルムを基にスタジオ番組を担当したディレクターが村木良彦さん、TD(技術チーフ)が加納孝夫さん。

クレーンカメラのワンカットで、フィルムプロジェクトの操作もスタジオで田英夫氏自身が行うという村木演出について、加納さんはこう言っていた。

「村木ちゃんのスタジオワークは完璧だった。セットデザインからカメラワーク、照明に至るまできっちり計算されていた。TDとして『ヨシ！村木ちゃんの意図を実現しよう』という思いで仕事をした」

コロナの時代に、また優れた先人が一人逝ってしまった。

訃報

外崎宏司 8月11日没。享年 84。テレビ朝日報道 制作など。ワイドショーの草分け「木島則夫モーニングショー」の初期スタッフで、1964年4月1日番組スタート日の担当

志津木敏 今年亡くなったが詳細は不明。享年 53。広島大学文書館調査員。放送人の会の総会や忘年会によく出席し、会員と親しく話していたのを、存知の方が多い。

会員名簿

2020.10.16 現在

【あ】 藍澤幸久 相田洋 相本芳彦 青木裕子 青山梯三 秋田和典 秋山豊寛 天野證範 雨宮望 新井和子 【い】 池田正之 石井彰 石井ふく子 石田研一 石橋映里 石橋冠 石原信和 磯智明 板谷駿一 市岡康子 市川哲夫 市村元 伊藤博文 伊藤雅浩 井上佳子 井上良介 今井義典 岩澤敏 岩瀬弥永子 【う】 上村忠 浮田周男 碓井広義 臼杵敬子 【え】 江川雄一 江口展之 遠藤利男 遠藤雅充 【お】 大池雅光 大川光行 大沢悠里 太田昌宏 大類なごさ 緒方陽一 岡野真紀子 岡室美奈子 岡本勉 小川治 小川和之 小河原正巳 沖野瞭 荻野慶人 尾田晶子 織田晃之祐 【か】 加賀美幸子 柏木登 片岡敬司 加藤滋紀 加藤拓 加藤義人 金平茂紀 川平朝清 鎌内啓子 亀谷弘美 鴨下信一 川喜田尚 川口健一 川淵恵子 河邑厚徳 【き】 北川泰三 北川信 北川祐美香 北出晃 北村美憲 北村充史 木下浩一 木原毅 木村成忠 【く】 工藤英博 隈部紀生 倉内均 訓覇圭 黒崎博 黒沢淳

【こ】 小池勝次郎 河野尚行 小玉滋彦 後藤和晃 小林和男 小山帥人 近藤邦勝 今野勉 【さ】 斎藤秀夫 斎明寺以玖子 寒河江正 坂元良江 桜井均 桜井元 佐々木彰 佐々木光政 笹山正勝 佐藤敦 佐藤幹夫 佐藤理恵子 佐野有利 澤田隆治 【し】 重延浩 重村一 重盛政史 静永純一 四宮康雅 柴田陽一郎 清水誠 志村一隆 下崎寛 下重暁子 下村幸子 白井博 新山賢治

【す】 菅野高至 菅野嘉則 杉田成道 鈴木俊樹 鈴木典之 鈴木弘貴 鈴木芳夫 鈴木嘉一 須磨章 【せ】 清野豊 関佳史 せんぼんよしこ 【そ】 菅根英二 【た】 高島秀之 高田宏 竹中一夫 田澤正稔 多田健 田中昭男 田中秋夫 田中直人 田中典子 田中則広 田原茂行 【ち】 千葉邦彦 【つ】 塚原あゆ子 塚本茂 塚本幹夫 辻本昌平 土屋敏男 つボイノリオ 露木茂 鶴橋康夫

【と】 東城祐司 戸田桂太 富沢一誠 豊原隆太郎 鳥谷規 【な】 長井展光 中尾幸男 中込卓也 中崎清栄 中島僚 中島由貴 永田浩三 永田俊和 永野敏一 中町綾子 中村敦夫 中村克史 中村季恵 中村美美子 中山和記 並木章 【に】 新村もとを 西憲彦 西村与志木 仁田豊文 仁藤雅夫 二宮文彦 【ぬ】 沼田通嗣 【の】 延江浩 信井文夫 【は】 萩原豊 林健嗣 林宣昭 林安二 原田令嗣

【ひ】 日笠昭彦 玄武岩 【ふ】 深尾隆一 藤井チズ子 藤井正博 藤田知久 藤久ミネ 藤村忠寿 古川重樹 【へ】 逸見京子

【ま】 前川英樹 牧之瀬恵子 増山麗央 松尾羊一 薫りんたろう 【み】 三上義智 水上毅 水野憲一 光原朋秀 三原治 三村景一 三村千鶴 宮崎洋 宮川鑛一 三宅恭次 【む】 村上光一 村上雅通 村上佑二 村田亨 【も】 本木敦子 元田成 諸橋毅一

【や】 八木康夫 矢島良彰 藪内広之 山鹿達也 山崎隆保 山崎裕 山路家子 山田尚 山田良明 山根基世 【よ】 吉澤保 吉田賢策 吉村豪介 吉村直樹 【わ】 和崎信哉 渡辺浩平 渡辺紘史

【賛助会員】 日本民間放送連盟 TBSメディア総合研究所 融合研究所 日本ケーブルテレビ連盟

新刊紹介 句集 手習い 佐々木光野

会員佐々木光政さんの処女句集。佐々木さんは平成27年放送人の会に入会、すぐに放送人句会に参加、以降句会には無欠席。佐々木さんは福島放送局長のとき東日本大震災に遭遇その筆舌に尽くしがたい重さ、困難さを忘れないため、この句集の句数は311句である。

編集後記

3月19日、玉田真也(第8回市川森一脚本賞受賞者)の芝居を池袋で見ると。東京芸術劇場の地下、コロナで3方向の扉を開け放ち、換気全開での公演。アフタートークは中止。マスク姿のスタッフがいなく緊張。玉田君に聞けば「役者・スタッフ、一人でも感染者が出たら、即中止！」の条件を呑んで、公演を認めて貰ったと言う。外題の「今がオールタイムベスト」が切なく響き、やがて芝居は『不要不急』とて、3か月間の中止となる。▼中止明け、最初に見たのは7月3日の座・高円寺、松村武の「猿女(さるめ)のリレー」。客は一人ずつ入場し、検温と手指の消毒の後、チケットの半券を自分で切る。前後と隣の席を空け、座席はまばら。総勢21人の役者たちの熟演がむなし。一生懸命だけに…。10月下旬になっても芝居小屋の活気はまだ戻らない。▼少し早いがPR。元会員の合津直枝さんから「向田邦子の取材を受けた。放送は来年の1月中旬、BSプレミアム。(た)

▼やっと会報ができました。がんばったのは特集「放送人の証言」の深尾さん、特集「パンデミック」の菅野さん、ラジオのページの田中さん、そして寄稿して下さった多数の方です。ありがとうございます。▼先日、夜10時過ぎ中央線四谷駅から八王子駅まで電車に乗るとガラ空き。60年八王子に住んで初めての体験で、「大衆」が消えたと実感しました。 祝